

人外魔境

有尾人

小栗虫太郎

青空文庫

大魔境「ムラムブウエジ悪魔の尿溜」

フランスの自動車会社シトロエンの探検隊——。これは、米
 地理学協会ほどの大規模なものではないが、とにかく一営利会社
 としてはなかなかの仕事をしている。最初は、アフリカのサハラ
 沙漠を牽引車トラクターで突破し、続いて、ペルシア、中央アジアを経て
 ペキンまで、無限軌道キャタピラーをうごかしていった大旅行隊キャラヴァンをさえだし
 ている。

さて、その三回目の計画であるが、すでに選定もすみ雨期あけ
 を待つばかりだそうである。それも、これまでのような自動車旅

行ではなく、謎と臆測おくそくと暗黒のうちうずもれている、前人未踏の神秘境を指しているのだ。

では、どこか？ そんな土地がまだこの地球上にあるのかと、読者諸君は不審がるだろうが、あるとも大有りである。

「未踏地帯テラ・インコグニタ」と、精密な地図にさえ白圈のままに残された個所が、まだ四、五か所はある。それらの土地は、なにか踏みいれば驚天動地的なものがあるだろうと、聴くだに探奇心をそそりたてる神秘境なのである。

そこでまず、選定会議にのぼった候補地をあげることにしよう。そうして、シトロエンの探検隊がこれからゆこうという場所が、いかにそれらさえも凌しのぐ超絶的な地位にあるかということ、読

者諸君にはつきりと知って貰おう。

一、南米アマゾン河奥地の、
リオ・フォルス・デ・デイオス
 Rio Folls de Dios の一帯。

二、北極にちかい、グリーンランドの中央部八千尺の氷河地帯にあるといわれる、
 “Ser-mik-Suah 《セルミク・シユアー》”
 の冥路よみじの国。

三、支那しな青海省の “Puspanada 《プシパマーダ》”
パイアンカラ
 沙河ヒマラヤの巴顔喀喇山脈中の理想郷。

四、？

第一のアマゾン河奥地というのは「神々の狂人」と訳される。

ここへは、米国コロンビア大学の薬学部長ラマビー博士一行が探

検したが、ついに瘴癘^{しょうらい}湿熱^{しつねつ}の腐朽霧氣^{かふくき}地帯から撃退されてい
る。ただ、白骨をのせた巨^{ヴァイクトリア・レギア}蓮^蓮の食肉種^{食肉種}が、河面^{かわも}を覆う
ているのが望遠レンズに映つたそうである。

第二の神秘境は、エスキモー土人が狂気のように橇^{そり}を駆つてゆ
くという、グリーンランドの中央部にある邪^{シユアー}霊^霊の棲所^{すみか}である。
そこは、極^{オーロラ}光^光にかがやく八千尺の氷河の峰々。そこには、ピア
リーヤノルデンスキョルド男でさえもさすがゆきかねたというほ
どの——氷の奥からふしぎな力を感じる場所だ。

第三は、梵語^{ほんご}で花酔境と訳される。そこは、遠くからみれば大
乳海を呈し、はいれば、たちこめる花香のなかで生きながら涅槃^{ねはん}
に入るといふ、ラマ僧があこがれる理想郷^{ユートピア}である。彼らは、そ

こを「蓮中マニ・パードメの宝苾」と呼んで登攀とうはんをあせるけれど、まだ誰一人として行き着いたものはない。そのうえ、古くは山海経せんがいききょうでいう一臂人いつびじんの棲所すみか。新しくは、映画の「失われた地平線」の素材の出所とにらむことのできる——まさに西北辺へんきよう 疆支那の大秘境といえるのである。

しかし、以上の三未踏地でさえ足もとにも及ばぬという場所がいったい何処どこにあつてなにが隠れているのか、さぞ読者諸君はうずうずとなつてくるにちがいない。それは赤道中央アフリカのコンゴ北東部にある。すなわち、コンゴ・バンツウ語でいう“M'ia mbuwezi 《ムラムブウエジ》” 訳して「悪魔の尿溜にようだめ」といわれる地帯だ。そこには、まだ人類が一人として見たことのない、

巨獣の終焉地しゅうえんち「知られざる森セブルクルム・ルクジの墓場」が、あると伝えられている。

ではここで、この謎の地域がけっして私のような、伝奇作者の
でたらめでないという証拠に、英航空専門誌『Flight』《フライト
》に載った講演記事を抜粋してみよう。講演者は、ナイロビ、
ムワンザ間のウイルスエアウエーズ航空会社のファーギスンという操縦士
だ。

私も、悪魔の尿溜攻撃は、数回にわたって試みましたが、結局
空からも征服は不可能という惨めな結論を得たばかりです。

飛行機万能の現代では、航空機の前に未踏地はなし——とまで

いわれるのに、なぜ悪魔ムラムブウエジの尿溜ムラムブウエジだけには敗退したか？ 悪気流か？ それも一因でしょう。

だいたい、悪魔の尿溜の北側は大絶壁になっております。そのうえがゼルズラと呼ばれる流沙地帯なのですが、そこは、上空の空気が非常に稀薄きはくで、よく沙漠地方におこる熱真空ヒート・ヴァキユムがで
きるのです。

そこへ来ると飛行機はもうよろよろと蹠よろめ蹠よろめぎます。しかし、絶壁下にひろがる悪魔の尿溜の湿林は濃のうちよう稠しろうきな蒸気に覆われてま
ったく見通しが利きません。その霪もやか、沼しろうき気か、しらぬ灰色の
海に、ときどき異様な斑点があらわれるのです。

私は思い切って、最後の飛行の時ぐつと下降してみました。と

ころが、いままで、濃霧^{ガス}か沼気かと思っていたのが驚いたことに雲のように群れている微細な昆虫だったのです。横三十マイルにもひろがる悪魔^{ムラムブウエジ}の尿溜^ジの上空をぎっしりと埋めて、おそろしい蚊^か蚋^{ぶゆ}の大群が群れているのです。マラリア、デング熱の病原蚊、睡眠病の蠅、毒蚋、ナイフのような吻^{くち}の大馬蠅の Tutwao 《チュフア》 ああ、その大集雲！

悪魔の尿溜に、よしんば金鉞が隠されてあろうとダイヤモンドが転がっていようと、あるいは珍奇獣虫がいようと原人がいようと、この永^{えい}劫^{じょう}霽^はれようとも思われぬ毒の羽虫の雲を除くには、恐らくガスマスクをつけ防虫完備の工兵が、優に一師団をもつてしても数年はかかろうかと思われぬ。

これが飛行家の観察した悪魔の尿溜だが、つぎに、その奥にあるといわれる巨獣の墓場のことである。おそらく読者諸君も、ゴリラや黒猩猩^{チンパンジー}などの類人猿や、野象にかぎって死体をみせぬのをご承知であろう。してみると、どこか到底人間には行けぬ密林の奥にでも、彼らの死場所がなければならぬ。悪魔の尿溜^{ムラムブウエジ}がこの条件にぴったりと嵌^{はま}っているわけだが、これも作者の創作と思われては困るから、歴然としたパラツフィン・ヤング卿の赤道アフリカ紀行、「コンゴからナイル^{カプト・ニリ}河水源へ」のなかの一記事を引用しよう。

晴天だと、ルウエンゾリ山が好箇の目標になるのだが……、降りだして雨霧もやに覆われてからは、ただ足にまかせて密林のなかを彷徨さまよいはじめた。泥凪ぬかるみは、荊棘とげいばら、蔦つた葛かずらとともに、次第に深くなり、絶えず踊るような足取りで蟻ありを避けながら、腰までもぐる野象の足跡に落ちこむ。

すると、前方約百ヤードほどのあたりに、ぴしぴし枝を折りながらドス赭あかいものが動いてゆく。ゴリラだ！ 私はこのコンゴの奥ふかくにくるまで、ゴリラには一度も逢わなかったのだ。そこで、ほとんど衝動的に連発ウインチエスター銃をとりあげようとした。すると、土人が一人飛びついて銃をおさえ、

「旦那、あのゴリラ《ソコ》は恩人でがす。殺すなんて、英人レコアの

旦那らしくもねえでがすぞ」

土人は、ゴリラのことを「Soko 《ソコ》」という愛称で呼んでいる。私は声を荒らげるよりも呆氣あっけにとられて、

「なぜいかんのだ。ゴリラが獲とれるなんて千載に一遇ではないか」

「それがです。旦那は、野象ぞうの穴へ落ちたとき、磁針ほうみをお壊しなすつたので、儂わしらは、どっちへどう出たらこの森を抜けられるか、いま途方に暮れているでがす。そこへ、あのゴリラ《ソコ》が教えてくれたでがすよ。つまり、おらが歩んでゆく先が北に当るぞちゆうて……」

「そんなことが、お前にどうして分るね？」

「あのゴリラ《ソコ》は、いま森の墓場へ死ににゆこうとしてい

るのだ。それが、わしらにはゆけねえ悪魔の尿溜ムラムブウエジにあるちゆうだ。ゴリラ《ソコ》はな、雨が降るとあんなには歩きましたねえ。ぼんやりと、手を頭にのせてじつと蹲しゃがんでおりますだ。わしらは、幼ちっけなときからゴリラ《ソコ》をみてるだが、雨んなかを、死神にひかれて歩かせられてゆくような、ゴリラ《ソコ》にかぎって北へゆかねえものはねえでがす」

私にはその悪魔の尿溜ムラムブウエジの一言がぴいんと頭へきた。事によつたら、いまいる我々の位置が途方もなく深いのではないか。そういうえば、密林のはずれにあるマヌイエマの部落で、《Kungo》《クンゴー》《カフユ》といっている蚊蚋かぶゆの大群が、まさに霧クンゴーのごとく濛々もうもうと立ちこめている。私は、そう分るとぞつと寒気だち、あのゴリラ

がいなければ死んだかもしれぬと思うと、いま頭に手を置いてのそりのそりと歩いてゆく、墓場への旅人に冥福めいふくの十字をきったのである。

ヤング卿はこうして倉皇そうこうと逃げかえって、危く一命を完了した。なまじ進めば、北は瞬時に人を呑む危険な流沙地域。他の三方は、王蛇ゴアでさえくぐれぬような気根寄生木の密生、いわゆる「類人猿棲息地帯ゴリラスツォーネ」の大密林。だが、読者諸君、そこへ踏みいつて無残にも死に、奇蹟きせきてき的にも大記録を残すことのできたわが日本人の医師がいるのだ。その踏破録を、シトロエン文化部の発表に先だって、これから物語風に書き綴つづろうとするのである。

有尾人ドドの出現

ポルトガル
葡領東アフリカの首都モザンビイクは、いま雨期のまっ盛りにある。

人が腐る、黒^{くろんぼ}人の膚からは白髪のような菌がでる——そういう、雨期特有のおそろしい湿熱が、いまモザンビイクをむんむんと覆いつつんでいる。雨、きょうもこの島町は湯滝のような雨だ。毒蠅のマブンガを避けて閉めきっている室のなか、座間の研究所の一室に、アツコルテイ先生がいる。イタリア・メドナ大学の有名な動物学の、この先生はなにものを待っているのだろうか

焦れきつて顎髭あごひげからはポタリポタリと汗をたらし、この醜氣うんきに犬のように喘あえいでいる。

「座間君、カークが僕になにを見せようというのだね。僕が、アツと魂消たまげるようなものというから船を下りたんだが……」

「秘中の秘です。なんとでも、先生のご想像にお任せしましょう」
「じゃ、オカピか、ゴリラかね」

「はっはっはっは、そんな月並みなものなら、お引き止めはしませんよ」

座間はただ、さも思わせぶったようににたりにたりと微笑ほほえんでいる。彼は、三十をでたばかりの青年学徒、小柄で、巨おおきな顔で、やさしそうな目をしている。しかし、一目肌をみればそれと分る

ように、座間は純粹の日本人ではない。三分混血児テルテイオ——アデンの雑貨商だった日本人の父、黒白混血のイタリア人を母とした三つの血が、医専を日本で終えても故国にはとどまらず、はるばる熱地性精神病研究にモザンビイクへきたのであつた。

といるわいるわ、女には舞踏病の静止不能症ラマーナヤーナ、男には、マダガ

スカル特有の『Sarinbavy』《サリムバヴィ》『や』『Koro』《コロ》『

そこへ、モザンビイク一の富豪アマーロ・メンドーサの援助があ

り、ついに研究所をひらき土着の決心をした。そうして、座間は

黒人の神となつた。生涯を、熱地の狂人にささげ、藪草やぶくさにうず

もれようとも、あわれな憑依ひょうい妄想もうそうから黒人を救いだそうとす

る——座間は人道主義ヒューマニズムの戦士だった。そうして、六年あまりも

モザンビイクで暮すうちに、彼はカークという密猟者と親しくなつた。次いで、よくカークをつれて奥地へゆく、アツコルテイ先生とも知りあいになつたわけである。しかしいま、ちよつと南アから寄港した先生を、なぜ座間が引きとめているのか。たしかに、なにかの驚くべきものをアツコルテイ先生に、みせようとしているのは事実であるが、一体なんであろう

折からそこへ、扉があいて若い男が姿を現わした。一見、黒白混血児とわかる浅黒い肌、きりつとひき締つた精悍せいかんそうな面がまえ、ことに、肢体したいの澆刺はつらつさは羚羊かもしか羊のような感じがする。

ジョジアス・カーク——国籍せきは合衆国アメリカだが有名なコンゴ荒し——禁獸を狩つては各地へ売る、白領コンゴのお尋ねもの一人だ。

カークはお待ち遠さまと微笑んで見せて、右手を扉のそとにだしたまましきい闕から入つてこない。やがて、彼の手にひかれてこの室内へ、まったく予期以上とばかりアツコルテイ先生が目をみはる、世にも不思議な生物がはいつてきたのだ。まったく、そのときの先生の驚きようといつたらなかつた。一眼鏡モノクルの、目をあけたままポカンと口をあけ、やつと経たつてから正氣がついたように、「おう、有尾ホモ・コウダツス人！」と唸うなるようにつぶや呟いた。

それは、全身を覆う暗褐色の毛、丈は四フィートあるかなしから子供のようであり、さらに一尺ほどの尾が薦せんこつ骨のあたりからでている。といつて、骨格からみれば人間というほかはないのだ。しかし、頭の鉢が低く斜めに殺そげ、さらに眉のある上じょう眼窩がんかきゆう弓

がたかい。鼻は扁平で鼻孔は大、それに下顎骨が異常な発達をしている。仔細しさいに見るまでもなく男性なのである。

それはまあいいとして、この有尾人からは、山羊やぎくさいといわれる黒人の臭においの、おそらく数倍かと思われるような堪たまらない体臭が、むんむん湿熱にむれて発散されてくる。アツコルテイ先生は、ハンカチで鼻を覆いながらじつと目を据すえた。

「ふむ、温和おとなしいらしい。ときに、君らには懐なついているかね」

「ええ、そりやよく」とカークが煙草の輪を吐きながら答えた。

「すると、これを獲とってから大分になるんだね」

「いいえ、此処ここへきてまだ七日ばかりですよ。第一ドドが、僕の手に落ちてから二週間とはなりません」

「ドドとは……」

「僕らがつけた、この紳士の名前です」

「はっはっはっは、じゃ、有尾人ドド氏というわけだね」

とアツコルテイ先生が笑っているなかにも、なにやら解せぬげうな色が瞳のなかにうごいている。野生のもの、しかも智能のたかい猿人的獣類が、わずか十日か二週間でも懐くはなずがあるだろうか。

「ときに、君はこのドド氏をどこで獲ったのだね」

「場所ですか」とカークは思わせぶったようにすぐには答ええず、まず、ドドを捕まえるにいたったいちぶ仍始終を語りはじめた。

「とにかく、ドドが懐いたというのは、最初の出がよかったから

ですよ。僕は先生のお説の、ゴリラ定期鬱狂説を利用して、今度こそ六尺もある成獣を捕えてやろうと思つて出かけたのです」

アツコルテイ先生は、前年度の学会にゴリラ定期鬱狂説を発表して、しがい斯界に大センセーションをまき起した。

ゴリラには、メラノコリー憂鬱病と恐怖症が周期的にきて、その時期がいちばん狂暴になりやすいという。そして苦悶くもんが募つて来て堪えら

れなくなると『Hydracem』《ヒラセウム》をな甜めにきて緩和す

るといふのだ。ヒラセウムとは、ハイラックス岩狸が尿所へする尿の水分

が、蒸発した残りのねばねばした粘液で、カークはこのヒラセウムのある樹洞ほらのまえに、わな陥穽を仕掛けようとしたのであつた。

「僕はわな陥穽をにらんで四昼夜も頑張つていました。すると、五日

目の昼になってとうとうやって来ました。それが、なん歳ぐらいのものか藪の密生で分りませんが、とにかく、ぴしぴし枝を折りながら樹洞ほらのほうへやってくる。やがて、えらい音がしてどつと土煙があがりました。しめた、生きたゴリラなら十万ドルもんだと、さつと土人と一緒に勢いよく飛びだすと……どうでしょう、たしかに落ちたはずのゴリラの真正面に向きあってしまったのです。しかし、すぐ相手は四足で逃げ出しましたがね」

「ほほ、わな陥穽なに落ちたのがそのゴリラでないとする……ドドかね」

「そうなんです、しかし、のぞ覗きこんだときはさすが驚きましたよ」
「そうだろう。君みたい……、コンゴ野獣の親戚しんせきでも、これ

には驚くだろう。しかし、最初のうちは抵抗しただろうか」

「それがしないのです。じつに、ひどい^{フラムベジア}梅毒痘にかかっていたのです。僕は、なにより可愛想になってきて、さっそく皮膚に水銀膏^{こう}をなすってやると、大分落ちついてきました。もう以前のように幹へからだを擦^{こす}ったり、泥を手につけて搔^かきむしるようなこととはしません。ただ、目をほそめて僕の手にある、水銀膏の罐^{かん}をものほしそうにながめているのです。それで僕はこいつは物になると思っ、その罐^{おとり}を匣^{おとり}に手近かの部落まで、とうとうドドをなにもせずひっ張^ひつ張^つってきたのです」

「なるほど、さすがはジャングルの名人芸だね」

思わずアツコルテイ先生は感嘆^もの声を洩^もらした。

「それから、ドドの苺果痘フラムベジヤのほうは座間君の手ですっかり癒りなおました。ですから、僕と座間君にはむろんのこと、この研究所の出資者メンドーサ氏の令嬢、マヌエラさんにも非常に懐なついているんです」

ちようどそこへ、扉がわずかに開いて、うつくしい顔がのぞいた。今も今とて噂うわさしたマヌエラ嬢だった。彼女は、真白な洗いたての敷布シーツのようにどこからどこまで清潔な感じのする娘だ。座間とは婚約の仲、また人道愛の仕事の上でもかたく結びついている。「先生が、どういう風にドドを観察なさるか、伺いにあがりましたわ」

マヌエラの明るい声の調子が、アツコルテイ先生の気分を爽さわや

かにしたとみえて、先生はさつそく観察の発表をはじめた。

はじめに尾をさして、いわゆる薦骨奇形のワイシエ・シユワンツ軟尾体だと

いった。つぎに、全身を覆う密毛がしらべられ、その一本立ての

三本くらいを、チンパンジー黒猩猩特有の排列と説明する。さらに、ドドの

後頭部が大部薄くなっているのが、「黒猩猩アントロポビテックス・カル的チンパンジー・オーレン禿頭

」ウスそつくりながら……耳も、円形の黒猩猩チンパンジー・オーレン耳。つぎに、眉があ

る部分の上眼窩弓がたかいのも、黒猩猩特有のものだと先生はい

う。そうなつて、次第にドドは人間黒猩猩間チンパンジー・オーレンの、雑交児というこ

とに証明されそうになつてきた。

すると、先生が俄然がぜん言葉を改め、ドドの頭上に片手を置いてい

つたのである。

「これがね、いわゆる ミクロケファレン 小頭 というやつだ。つまり、頭骨の発達がなく脳量がない。したがって、智能の度が低いという原人骨同様だ」

原人という言葉にとつと部屋中が騒がしくなった。誰よりも、マヌエラがまつ先に質問をした。

「じゃ、ドドが原人なんでございますね。とうに、数百万年もまえに死滅しているはずの……」

「とにかく、人間黒猩猩々の雑交児という説に、これはむろん並行していえると思うね。いや、わしは断言しよう。古来、いかなる蛮人にもこれほど下等な頭骨はない——と」

生きている原人、血肉をもった原始人骨——まさに自然界の一

大驚異といわなければならぬ。

では、ドドはどうして生まれ、どこから来……、また純粹の人間とすればどうして数百万年も、固有のかたちが変わえられずに伝わったのだろうか。

でまず、ドドを人獣の兎として考えてみよう。そうすると、なぜ群居をはなれて彷徨さまよっていたのだろうか。捨てられたか……追放されたか……？ あるいは、ずうっと幼少時から孤独でいたとすれば野獣や、王蛇ボアが横行する密林でぬけぬけ生きられるわけはない。また、故郷のジャングルをしたう郷愁といったものも、ドドには気振けぶりにさえもみえないのだ。

郷愁を感じない、野生動物がどこにあるだろうか。つかまって、

環境がちがったときはどんな生物でも、食物をとらなかつたりして郷愁をあらわすものだが、それがドドには不思議にもないのだつた。

すると、カークをふり向いてアツコルテイ先生がいった。

「まだ捕獲した場所を聴いてなかったね。いつたい、このドドをどこで見つけたんだ？」

「それが、ほぼ東経二十八度北緯四度のあたりです。イギリス英領スーダベルギーンと白領コンゴの境、……イツーリの類人猿棲息地帯ゴリラスツォーネから北東へ

百キロ、ムラムブウエジ『悪魔の尿溜』の魔所へは三十マイル程度でしょう」

ムラムブウエジ悪魔の尿溜——それを聴くと同時に、一座はしいんとなつてし

まった。ただ、屋根をうつ大雨の音だけが轟とどろいている。

「そうか、悪魔の尿溜のそばか——」

アツコルテイ先生もここまで来ると、あつさり断念めたように投げやりな口調になった。ドドを、悪魔の尿溜と組合せることは、もう科学者の領域ではなかったからである。

それから先生は、ドドのために急遽きゆうきよ帰国する決意をし、あたふたと時計をみながら帰っていった。そのあと、座間とカークが疲れたような目で、ぼんやりと屋並みをながめている。

砂糖菓子のような回教寺院モスクの屋根も港の檣しやうぐん群も、ゆらゆら雨脚のむこうでいびつな鏡のようにゆれている。そのとき、仏フレンチ・マダガスカルサーピスのマダガスカル航空の郵便機が、雨霽もやをくぐりくぐり低空をとおつてゆく気配。座間は、むっくり体をおこして言った。

「君、あれなんだがね」

「あれって？ 飛行機がどうしたというんだね」

「つまり、ドドのことなんだ。ドドは、飛行機をみてもけっして恐がらないのだけ。かえって、嬉しそうな目付きで、奇声さえあげる。そうかといつて、『ムラムブブウエジ悪魔の尿溜』の近傍に航空路はないよ。

インペリアル・エアウエーズ英 帝 国 航 空 も、エール・アフリカフランスの亜弗利加航空も、それぞれ地

図のうえで半度以上も隔っている。奇怪だ。猿人、原人といわれるドドが飛行機に驚かない。それでいて、ボア王蛇や豹をみるとひどく恐がる」

「きつと『悪魔の尿溜』探検の飛行機でもみたんだらうよ。しかし、五度や六度で、馴れるとは思われないな」

太古以前の、原始生活をしていたはずのドドが飛行機に驚かない——これはまさに不思議以上だ。やはりこれはアツコルテイ先生が一度疑ったように、ドドは一種の作りものではないのか。そう思ってながめると、とうてい想像もできないようなおそろしい秘密が、ドドの肉体に隠されているように思われて、しみじみそれから恐しくさえなる。

暗くなってきた。すると、雨もやのむこうから、ブーツと汽笛がひびいてくる。エルダー・デムスター E・D・S の沿岸船ベンガジ丸が、いまモザンビイクにはいつてきたのだ。しかしその船は、やがて悪魔ムラムブウの尿溜エツへ一同を駆かりやろうとする、運命の使者を乗りこませていたのである。

ミス・ジキル・ハイド
善玉悪玉嬢

ベンガジ丸には、ヤン・ベデーツというベルギー青年が乗りこんでいた。

これは、マヌエラの父の旧友の息子で、マヌエラとは筒井筒つついづつの仲だが、うまがあわぬというのか、マヌエラは非常に彼を嫌っていた。それに、どこへいっても腰の落ちつかぬ男で、先ごろまで、エジプトのミスル航空会社で副操縦士コパイロットをしていたが、そこでも、喧嘩をしたらしくモザンビイクに帰ってきたのである。マヌエラの父が親代りで、ヤンの父の遺産を保管しているからだっ

た。

ところがヤン・ベデーツがくると、研究所の空気がきゆうに乱れてきた。それはヤンが患者を汚ながつたりぎやくたい虐待するばかりか、座間やカークには、この混血児めと蔑視的な態度を見せるからだった。

「なにか、ありましたんでしよう？」

今日も今日とて案じ顔に、座間の胸のボタンをいじりながらマヌエラが、やさしい上目使いをして訊ねた。

「さつき、ヤンがたいへんな目をして、ハアハアいいながら水を飲んでいましたよ。それからカークさんは、拳固のへんに辛子膏をなすつていらつしやるんですの」

「じゃ、やったんでしよう。カークは、いつかやってやると言っ
てましたからね。ジヤングルの主が野牛を殴りとばすような勢い
でやったんじゃ、ヤン君もさぞ痛かったでしょう。しかし、ヤン
君の身にもなれば……」

「え？ なんのことですか」

マヌエラは聞き咎めた。

「つまり、三年ぶりでここに帰ってくると、あなたには思いがけ
ない僕という人間ができています。八つ当りしたくなるのも無理は
ないでしょうよ」

しかし、マヌエラはかなしそうな目をして、

「あの人がじぶん勝手な僻みひがでどういいう考え方をしようと、それ

にあたしたちまでひき摺ずられるわけはありません。ねえ、ヤンはヤン、こっちはこっちですわ」

と、香りのいい髪を嗅かがすように、座間の胸のなかへ頬をうずめる。

「あたしは、あなたの日本の血を尊敬してますわ」

まるで素直な子供のようない方であった。座間には、それが弱い電気のように、快よく響いてくる。すると、マヌエラがふと話題を変え、

「そうそう、この週の報告をしなきゃなりませんわ。でも、ドドは相変らずですの」

と、引き受けたドド 馴じゅん育いくの結果を話しだした。

「火がわかったのが三週まえでしたね。手工はどうでしょう？」

「まだ、そんなにお急せきになつたつて……。でも、先生から言いつけられたことは、ちゃんちゃんとしてますわ。ちかごろは、いったいドドがどんな機嫌でいるか——つまり、ドドの感情表出も見ています」

「はあ、それがわかりますかね」

「ええ、第一ドドは笑われるのを嫌います。それに、色も知つてゐるし記憶力もたしかです。また、相当な学習能力もあります。それで、いつもあたしが使っている水すいせん仙色の封筒ね、あれを、構内のポストに入れるのを昨日あたりから覚えましたの」

「ほう、そりやお手柄だ、それから、先生がいわれた餌じりょう料によ

る実験は？」

それによつて、ドドが原人か人獣児であるか、その点がはつきりと分るはずだった。

もちろん、これはアツコルテイ先生の指図で、難しく言えば「皮膚色素の移行」の研究である。たとえば、果実を主食とする黒人にたいし、その量を減らすと皮膚の色が淡くなる。また淡黒色のホツテントツトに常食の乳を減らすと、その色がしだいに濃くなつてくる。ことに、その変化がはやいのが類人猿で、つまり、ドドがたべる生果の量を減らして、その効果をいち早くみようとしようというのだった。

マヌエラは、餌料のことを聞くと、かるく口を尖^{とが}らせて、

「いけませんわ。ドドは人間ですわ。科学ってなんて残酷なんですよ。やれ、ドドに蛋白質たんぱくを与えろ、もし黒猩猩チンパンジーの血があれば、きめんに衰弱するとか、食べものを減らして皮膚の色をみろとか……、そんなこと、それは動物にすることだと思えますわ。ドドはあくまで人間で、あたくしの友だちです」

ふかい、同情の念とかたい信念とで、マヌエラがきつぱりと言いつつ、彼女の、骨にまで浸みたカトリックの教育は、よくこころした場合、一步も退かせないのだ。座間は浄きよらかな百合ゆりの花をみるように、しばしマヌエラの顔を恍惚こうこうとながめていた。

まったく、ドドはマヌエラのそばを一瞬の間もはなれようとしていない。いないと、いまも聴えるように悲しそうな叫び声をたてる。

お嬢さん、いまに魅入られますよ——と、カークは冗談に言つたけれど、まったく二人の親密さにはそう言いたくなる。

ところが、その夜不思議な出来事がおこつた。

夜になると、温度はいくぶん下がるけれど、その倦怠けんたいさと発汗の気味わるさ。湿気の暈かさが電灯の灯をとりまいている。

こういう時には、ドドの唸りうな声さえもちがってくる。じつに、誰でも平常でなくなるような、蒸し暑い、いやな晩であつた。

その夕、座間はヤンと激論を戦わした。それは、ドドを売れば十万やそこらにはなるだろうから、それにヤンの資産をくわえて研究所を拡張し、名実兼ねた総合病院にしようというのだつた。つまり、座間がしている社会施設を、ヤンが営利化しようという

のである。

しかし、これには、なによりマヌエラが真向から反対した。それでも、ヤンはせせらわら嘲笑せせらわらつて、なアにお父さんを説き伏せて晚にきますよと、しやあしやあ洒しやあしやあ々と自信ありげに帰つていったのである。そうして、研究所に一つの危機がくることになった。

と、その夜、座間が寝つかれないので、書齋へゆこうとしたとき、ドドの部屋のまえをとおると、鍵がおりてない。そこへ、患者面会人がやすむ部屋のほうで、微かにごそりごそりと音がする。まさか、ドドが逃げるわけではないかと、そつとその部屋の扉をひらいたときだった。思わず、あつと叫びそうなのをから辛くも抑えたほど、座間おどろははげしい駭おどろきにうたれた。

そこにいたのは……ドドではない。さっきの憎しみを忘れたように、ヤンとマヌエラが抱かかんばかりに向き合っている。座間はまず、じぶんの目を疑った。続いて、耳までも疑わねばならぬような会話を聞いた。

「あたしを愛してくれますか」

ちよつと、漁色にすさんだヤンでもふるえた声で言うと、

「ええ、あたしも愛してくれますか」とマヌエラも切なそうに呼び吸^きをする。

あのマヌエラ、昼間のマヌエラがなんとという変りかた

丁度このとき、おおきな伸びをしながらカークが降りてきた。

すると、ヤンはいきなりマヌエラを突きはなし、手をふりながら

向うの扉から消えてしまった。座間は、この世界がまつ暗になつたような気持で、ただその場に茫然ぼうぜんと立ち竦すくんでいた。

と、ヤンの姿が消えたと思つたとき、またも座間をあつと言わせるようなことが起つた。

それは、清浄無垢むくなマヌエラとも思われぬ……、また淑女たらずとも普通の町家の女でも、よもや口にはしまいと思われぬような醜しゆうわい猥わいな事柄を、まるでじぶん自身に言いきかすかのようしやべに、マヌエラがべらべらと喋りはじめたからだ。

マヌエラ！ 断じて幽霊ではない、真実のマヌエラだ。昼間の、灼かれようとも挫くじけない人道主義ヒューマニズムの天使が、夜は、想像もされない別貌をしてあらわれたのだ。どっちだ？ どっちが本当のマ

又エラかと、座間は白痴のように頭を振り振り廊下へでていった。と出会いがしらに、ドドの手を引いてカークがやってきた。

「君、馴じゆん育いく掛りのお嬢さんへようくいわなきア駄目だぜ。鍵を忘れたもんだから勝手にでちまって、それに、此こいつ奴までがえらく亢こう奮ふんしている」

「どこにいたんだ？」

「患者面会入室の廊下の羽目際だ。なにか、こいつが亢こう奮ふんするようなことがあったらしい」

なるほど、これまでのドドには決してみられなかった、一種異様な激情のさまを呈している。犬歯を齒齦はぐきまで鉤かぎのようにむきだして、瞳は充血で金色にひかっている。そして、ひくい唸り声を

絶れ絶れきぎにたてながら、今にもかくれた野性がむんずと起きそう
な、カークでさえハツと手をひくような有様だった。

それからドドをいれて扉に鍵をおろすと、座間はカークを促うなが
しながら戸外へ出ていった。やがて本土とのあいだが二町ばかり
にせまつている、有名なマラガシユの入江に出た。

湯のような雨……くらい潮が……ぼうつと燐光にひかる波頭を
よせてくる。そして砂上の、ひいたあとは星月夜のようにうつく
しい。だが座間は、どうしてカークとこんなところへ来たのかじ
ぶんでも分らなかつた。

「どうしたい、いやに悄しよんぼりして……。まさか、猫の死骸に念
仏をいいにきたんじゃないだろうが」

カークは、いつもとちがって底気味悪さを湛^たえている座間を景気づけるように言った。すると、座間はいきなりふり向いて、

「おい、僕にドドを売っちゃくれまいか」

「えッ、ドドを売れって」カークも少からず驚いて、

「なんのためだ。僕の手から買ってどうするつもりだ」

思わず見上げる座間の眉^び宇^う間^{かん}には、サツと一閃の殺伐の気がか

すめてゆく。殺してやる！ マヌエラがあゝの魔性のものに魅込まれたのでなければ、あゝも奇怪な二重人格をあらわすわけではない。と、知らず識らず、この入江の腐肉の気にさそわれてきた座間である。

カークは早くも、それを悟ったと見え改まったような調子で、

「じゃ、その話を真剣にとるがね。すると、まず、売る売らないに先だつて、決めておきたいことがある。それは、ドドが獣か人間かということだ。売っていい動物か、売ってはならない人か：：サア座間君どっちだろう」

言われて、座間の咽喉のどがぐびつと鳴った。しかし、ちよつと顫ふるえただけでなにも言えなかつた。

「人身売買……：：奴隷売買を……いまこの現代に口にする奴があるかね。それとも、ドドを人獣の兎として——その場合を君はどう

考える？ 混血だ、おなじことだよ。ドドが黒猩猩チンパンジー々と人のまざ

りなら僕は、半ミューラート黒、君は三分混血兎テルテイオだ。僕らが白人以下のもの

のとして蔑視されるのも、君が、半分の獣血をみとめて、ドドを

売れというのも……」

そのカークの言葉を身に滲しむように聴きながら、座間はくらしい海の滅入るような潮騒しおさいとともに、ひそかに咽むせびはじめていたのだ。

*

その一夜は寢床のなかで転々としながら、ついにまんじりともしなかった。マヌエラと、ドドの奇怪な行動を考えあぐめばあぐむほど、ますます頭が冴さえて眠れるどころではなかった。

マヌエラのあれは、「ジキル博士とハイド氏」のように二重人

格なのか——と、ますます糸のもつれが深まるなかで、座間は追及の鬼のようになっていた。それとも、ドドに同情を深めすぎた結果か？ といつて淑女を流す^{けが}ような想像はしなかったが、もしやあるかも知れないドドの魔性が、恋情とともにマヌエラに絡み^{から}ついたのではなからうか。

あのとときドドは羽目を隔てていたが、それを透して、なかのマヌエラを遠くから動かす——そんなことは、土人の魔法^{ウィッチ・ドクター}医者なら朝飯まえの仕事だ。まして、飛行機をみても驚かぬようなドドには、なにか底しれぬものがある。

マヌエラ自身の素質か、ドドの魔性かと、廻り燈籠のような疑問が考え疲れたあげくふと消えて、座間は思いがけもしなかった

大きな穴が、じぶんの足下に口を開いているのに気がついた。ああ、二重人格でもなければ、ドドの魔性でもない。たんなるマヌエラの裏切りなのだ。ヤンがきてその純白の肌を見、振返つて座間の黒々とした皮膚をみたとき、マヌエラは一途に座間が嫌いになったのだ。売女ばいた、売女め！ とかきむしるような言葉を、寢床のなかで座間は咆ほえたてていた。やがて夜があけた。雨が暁の微光に油のように光りはじめてきた。

その翌夜、カークを書斎に呼びいれて、座間は氣負つたように話しはじめた。

「君、僕は旅行しようと思う」

「よかろう、君はきのうの晩ちよつと変だったが、きつと、過労

のせいだと思う。どこへゆくね？ スイスかウィーンかね」

「いや、この大陸のずうつと内核^{なか}へゆきたいんだ。コンゴのイツーリからずうつと北へ——僕は、未踏^{テラ・インコグニタ}地帯にゆく」

「え？」

「ぼくは『悪魔^{ムラムブウエジ}の尿溜』へゆくんだ！」

ナイルの水源閉塞者

カークは唾然^{あぜん}として座間を見詰めていたが、やがて、

「よし、聴こう。しかし、命がけの観光なんてないからね。むろん、目的もあり見込みもあつてのことだろう」

「そうだ。ときにカーク、君はコンゴへ入り込んで禁獣を狩る。それで、いちばん金になったときはどのくらいなもんだ」

「マア、五万ドルかね。オカピを獲ったときは、そのくらいになつたが」

「ゴリラは？」

「あれは獲れん。あいつは、遅鈍のそついてるようだがそりやこうか狡

猾つで、おまけに残忍ときてるんだから始末がわるいよ。いつそ、

オラン・ウータン

プロフェッサー

猩々チンパンジーのような教授チンパンジー然としたやつか、黒猩々チンパンジーみた

いな社交家ならいいがね、どうも、厭世ペシミスト主義者とか懷疑主義者と

いうやつは、獵師にはいちばん扱いにくいんだよ。しかし、射殺しただけでも二、三万にはなるだろう」

「じゃ、そのゴリラが……、無数と、死体をならべている溪谷があつたとしたら……。ざつと、世界の大学を六百とみて、それに、骨格一つずつ売つたにしても、千万長者にはなれる。だが、それは君の仕事だ。僕の目的は別のほうにある」

「冗談いうな」カークはからからと嗤わらいはじめた。

「本気で聴いてりやいい気になつて、そんなところが、もしあるなら俺が逃すもんか」

「あるとも」座間は自信気たつぷりにいう。

「僕は、友情にかけ君の勇気を信じていう。ところで、君は、ヘロドトスという歴史家を知っているかね」

「むろん、みたことはないが名だけは知っている。ギリシアに、

昔いたという博識ものしりだろう」

「そうだ。ところが、そのヘロドトスが書いたなかに、ナイル河の水源についてこういうことがある」

ヘロドトスが、ナイルの水源について次のような話を、エジプ

トサイスの長官からミネルバで聴いたことがある。

ナイルカプト・ニリの水源は、クロフィス及びメンフィスという、シエーネ

とエレファンティス間にある二つの山巔——呼んでモンス・ルーヌラ半月の山脈

という渓谷の奥にある。その半月の山脈には『Colc 《コルク》』

という湖があり、バメテイクス王が、綱を数千『ogye 《オギエ》』

も垂れたが底に届かずとある。つまり、ナイルの水源は、その奥にあるというのだ。

さらにそこには、「盤根パルス・ラディコススの沼セブルクルム・ルクジ」「知られざる森の墓場」があり、矮人ピクミエンが棲み有尾人ホモ・コウダツスがいる。そしてそれが、場所というのが悪魔の尿溜ムラムブウエジで、棲んでいる矮小有尾人がすなわちドとなる——座間がこう結論したのである。

「なるほど、しかしその、むずかしいラテン語を説明してもらおうじゃないか」

「それはね、『盤根パルス・ラディコススの沼』というのは、錯綜さくそうたる根の沼

だ。沼が盤根錯綜たる、叢林のしたにあるという意味だ。それから『知られざる森の墓場』というのは、巨獣の終焉しゅうえんち地だ。死体

をみせぬ象や類人猿がそこにきて眠るという。ねえカーク、どつちにしても、悪魔ムラムブウエジの尿溜ムラムブウエジじゃないか。しかも、有尾人ドドの故郷

だ」

そういえば、カークもそれに似たような土人の伝説を聴いたことがある。ヌグンベという、ドド発見地の近傍の部落だが、そこから悪魔の尿溜の方向にあたる北西かたの山腹に、*Leo* ≪レオ ≫ “ という奥しれぬ洞窟があるのだ。——そこが、人類発祥の地だという。つまり、太古のとき動物とともに、彼らの祖先がその洞から出てきたというのだ。

まったく、そういえば数えきれぬほどあるではないか。こういう、無稽な伝説が探検によつて裏書きされ、また、そういうものがしばしば因となつて、探検欲をうごかし大発見をさせたことが！

ここに……、いまその洞窟のあなたには悪魔の尿溜がある。しかもそこが、半獣児ドドの発生地に目されている。

「どうだ君、ムラムブウエジ悪魔の尿溜なら何億年も処女でいられるよ。そこで

は、動物も、植物も原始地球のままだ。獣交も、さつりく殺戮も自然律

にすぎない。そこで僕は、アツコルテイ先生の説をもう一步すすめるよ。つまり……ドドは、そこにいる原始人と親和的な、黒猩猩との雑交児だろうということだ。第一、親を有尾人とするのには、尾がある。それ以外は、外見、智能といいそつくりのチンパン黒猩猩だ」

カークは、すっかり圧倒されてしよんぼりと瞬いている。座間の、ちがった人のような不思議な情熱を、どこに、こんな静かな

男にこんなものがあつたのだらうと……、相手の唇を呆然とながめていたのである。

「それから」と座間はすべるように続けてゆく。

「なぜドドが郷愁を感じないかということが、僕にはやつと分つたよ。それはね、^{フラムベジエ} 苺果痘をわずらつて死期を知

つたのだ。そして、死ぬために森の墓場へいった。そうなるよ、

もうじぶんは帰れない……、これから、知らない世界へゆかねばならぬということが、彼らには本能的にわかる。そこへ、ドドは道をちがえたのだ。そして、森の墓場へはゆけず、君の手に落ちた……。だから君にも抵抗をしない……。こんな人里へきても郷愁を感じない……。ねえカーク、僕はその墓場へ、^{ムラムブウエジ} 悪魔の尿溜へ

ゆきたいんだよ」

原人、類人猿、象もそうだろうか？ 彼らが、死期をさとして森の墓場へゆこうとするときは、まったく本能的に帰郷の意志がなくなるという——座間の明快な推測であつた。

しかし、そういう座間が、淋^{さび}しそうに微笑んでいる。恋の空^{むくろ}骸が、死をもとめるかわりに未踏地をえらんだのだろう。やがて、カークとのあいだにかたい盟約が成りたつた。

ところが、そのことをマヌエラに話すと、意外にも彼女が一緒にゆこうと言いだしたのだ。犠牲が、ねがう幸福のほうに、マヌエラを向けようとするとき、意外にも、それを蹴つて敢然とゆくという。座間はすっかり分らなくなつてしまった。

間もなく、マヌエラのあとを蛇のように追う、ヤンを加えドドを連れて、まずさいしよの根拠地となるコンデロガへ発つたのである。

「ちかごろ、七郎はどうしちまったのよ」

話があると、マスカの実が地上に垂れさがっている陰へ、マヌエラが座間を呼びこんだ。雨期あけの灼いりつけるような直射のしたは、影はすべてうす紫に、日向ひなたの赭土は絵具のように生々しい。それがコンデロガを発つ探検第一日の前日だった。

マヌエラは、胸に飛びこみたい衝動を抑えているように、ぱちぱちと伏目で瞬ひらいている。

「どうもしませんよ。僕は、相変らずの僕ですが」

「いいえ、ちがっています。まえは、そんな冷ややかな七郎ではありませんでした。女は、そんな点にはいちばん敏感ですよ。ねえ、なにか、お気に障るさわようなことがあつて？」

すると、座間がまた迷うのである。それまでは、ヤンとあの夜の狂態はなんだと、彼はマヌエラに瞋恚しんいの念を燃やしていた。それが、こうして見ている、初々しさ……たどたどしさ。なんだかじぶんのほうが思い過しのような、座間にはそんな感じさえしてくる。

あれ以後、ヤンとマヌエラのあいだは非常に外々よそよそしいものだった。少なくとも、ああしたことは一度だけらしく、翌日は、ヤンが根城にしようとした総合病院化を、父にすがって一蹴してし

まったのである。これにはヤンも座間と同様おどろいたことだろう。しかし、彼は一夜の甘味をけっして忘れるような男ではない。どんなに白眼視され相手にされなくても、またのチャンスを狙いながら探検隊をはなれなかつたのである。

まったくマヌエラには、座間もヤンもおなじ考えにちがいない。不思議な女だ、二重人格かドドの所業かと……、ヤンが、鉄面皮を發揮して探検隊に加われれば、座間はあれこれと非常に迷いながらも頑固な壁をマヌエラに立てつづけているのだった。

ところで、この探検の費用はマヌエラの父がだし、それも座間が疲労を癒す物見遊山いあとしか考えていない。

カークも、大湿林の咆吼ほうこうをよぶ狂風を感じはするが……、死

を賭^として、不侵地悪魔の尿溜をきわめようなどとは、夢にもさらさら思わないことだった。そしてまた、マヌエラも、おなじように考えていた。ただ、しばらく仕事から離れればと……、ちかごろ座間の様子がじつに変であるだけに、どうかこの旅行で静養してくれと、じつさい悪魔の尿溜のことなど最初から頭になかった。しかも、座間とてもおなじようになつてきている。

それは、さいしよカークと二人だけと思つたところへ、意外にもマヌエラが加わるし、ヤンが追ってくる。そうして、絶えずマヌエラの美しさをみていると、この探検は、じつに悪魔の尿溜攻^{ムラムブウエジ}撃にあるのではなく、ヤンを除く、天与のまたとない機会のように思われてきた。密林、鱒^{わに}のいる河、野獣、毒蛇。ここでは、下

手人に代ってくれるあらゆるものが豊富だ。

と、その考えが、やはりヤンにもあるらしい。そうして、二人は胸に敵意をひめながら、どうやらさいしよの意図とはちがってしまった探検隊が、数日後はコンデロガを発つたのである。

ところで、悪魔^{ムラムブウエジ}の尿溜攻撃の進路であるが、それは、西方、南方の境界部はコンゴの「類人猿棲息地帯^{ゴリラスツォーネ}」、北は、危険な流沙地域である大絶壁にかこまれ、わずか東のほうに密林帯が横たわっている。ところが、これまでの数回の探検隊とも、そこへはいると同時に消息を絶ってしまうのだ。まったく、木乃伊^{ミイラ}取りが木乃伊というあの言葉のように、あとからあとからと続いても一人の生還者もない。しかし一同は、ともかくその道をゆくことにした。

二百の荷担ぎ——それに、車や家畜をふくめた長蛇の列が、イギリス駐屯軍の軍用電線にそうて、蟻塚ありづかがならぶ広漠たる原野を横ぎってゆく。土の反射と、直射で灼いりつくような熱気には、騾らばの幌車ほろぐるまにいてもマヌエラは眠ってしまふ。やがてゆくと、白蟻が草を噛かみきつたあとがある。兵隊蟻の、襲撃を避けるため不毛の地にしてしまふ。白蟻がちかければ沢がちかいのだ。気のせいか、草の丈がだんだんに伸びてゆく。間もなく、第一日の夜営地になる、うつくしい沢地があらわれたのだった。

水際には、蜀葵たてあおいやひるがおのあいだにアカシヤがたつている。水は、一面に瑠璃色るりの百合をうかべ肉色のペリカンが喧やかましい声で群れている。マヌエラは、こんな楽園が荒野のなかにある

のかと、いそいそと水際を飛びあるきはじめた。そこへ、カークが記憶があるといいだした。

「その沢から、あの藪^{ブッシュ}地を越えて、ほぼ十マイルもいったところだ、ドドの発見地なんだ。おいドド久しぶりで故郷^{くに}へかえろうぜ」

しかしドドは、マヌエラのうごきを貪るように追っている。またつ白な脛^{すね}、花を摘んで伸びたときのうつくしい均斉。

それを追いもとめる目には通じない意志に、悶^{もだ}えるようなかなしそうな色がうかんでいる。

またドドは、ここへ来てから何ものかの呼び声をうけている。ときどき、段状にかさなってゆく中央山脈の、一染の、樹海と思

われるあたりをおそろしい目でながめていたり、なにより、葉摺はずれの音にもびくつとなるし、あらゆる野性のものが呼び醒さまされようとしている。それには、座間もカークもとつくから気がついていたのだ。

「ドドは、森の墓場へゆき損つて人の手に落ちた。しかし今に、そのとき失つた野性が強くなるか、それともマヌエラに惹かれて人の世にとどまるか——いずれはどちらかになると思うよ。しかし、注意は充分しなきゃならんね」

探検隊がドドを連れてきたには目的があつたのである。それは、さいしよカークと逢つたその場所へゆけば、おそらく故郷を思いだして先頭にたつのではないか。そうして隊が、その跡に続けば

人にはわからない、悪魔の尿溜への極秘の道をゆけるのではないか——と。しかし、その試みは失敗に終わってしまった。ドドは、はじめて覚えたマヌエラの魅力に、帰郷の意志などはとつくに失ってしまったている。

その夜、はじめて夜明けまえにライオンの咆吼ほうこうを聴いた。藪地のなかで、豹にやられるらしい小野豚センズの声もした。やがて、危険な角ホーンド・ヴァイパー蛇のいる藪地を越えたとき、はや隊のうえにおそろしい不幸が舞い落ちてきた。

それは、抵抗のつよい騾つばをのぞくほか、いそいで河中に追いこんだ水牛六頭以外は、野牛も駱駝らくだも馬も羊も、みな毒蠅のツエツエに斃たおされたのだ。それから、文字どおりの難行であった。荷バ

担ガツスぎは、荷かさが嵩かさんだので値増しを騒さわぎだし、土はあかく焼けて亀裂はが這はい、まさに地の果か地獄のような気がする。灌かん木ぼくも、その荒野にはところどころにしかない。たまに、喬きよう木ぼくがあつても枯れていて、わずか数発の弾でぼろりと倒れてしまうのである。しかし、もうそこは山地にちかい。左には、連嶺をぬいて雪冠をいただいている、コンゴのルウエンゾリがみえる。そのしたの、風化した花崗石グラナイトのまっ赭かな絶壁。そこから、白雲と山陰に刻まればるばるとひろがっているのが、悪魔の尿溜につづく大樹海なのである。

翌曉、赭あかい泥河でいのそばで河馬かばの声を聴いた。その、楽器にあるテューバのような音に、マヌエラは里が恋しくなってしまう。

しかしまだ、ここは暗黒アフリカの戸端とばくち口にすぎない。きのう見た、藪地のおそろしい棘きよくそう草、その密生の間を縫う大毒タランツラ蜘蛛マグヌス——。しかし今日は、いよいよ草は巨おおきく樹間はせまり、奥熱地の相が一步ごとに濃くなってゆくのだ。そして、この三日の行程が四十マイル弱。最後の根拠地となるマコンデ部落にはいつたのが、翌日の午過ひるぎだった。

ここから、想定距離二十マイルの山陰に、悪魔の尿溜の東端をみるはずなのである。そしていよいよ、これまで経てきた平穩な旅はおわり、百年の道にも匹敵するその二十マイルへ、悪魔の尿溜攻撃がはじまるのだった。

「とんでもねえ。荷担バガジスぎにゆきア、死にに往ゆくようなものさア」

酋長がぐいぐい棕櫚酒ボムピをあおったり印度大麻ムトクワーネを喫ったり、すこぶる上機嫌のなかでもこれだけは聴かなかつた。

「マア、論より証拠というだで、ちよつと見てもらいますべえ」
外にでると、連嶺のしたは一面の樹海だ。樹海のはての遠いかなたに、ゆらゆら煙霧のようなものが揺ぎあがっているのがみえる。すると、そばの土人がおそろしそうな声でさげんだ。

「ほうれ、煙が鳴るだよ」

気のせいか、その煙霧がブウンと鳴っているような気がする。やがて、陽が落ちかかると硫黄色いおうにかがやいて、すでにそのときは塊雲のように濃くなっていた。煙が鳴る——人煙皆無の大樹海のかなたに、毎日、日暮れちかくなるとこの霧が湧くという。

そしてそれ以来、この部落を通過して悪魔の尿溜を衝こうとする、探検隊が一人も帰ってこないのだ。しかし、往ゆけるところまでというとやっと承知して、あくる日、荷担バガジスぎとともに密林をわけはじめたのである。

そこは、虎でもくぐれそうもない 蔦つた 葛かずら の密生で、空気は、マラリヤをふくんでどろつと湿しつけている。大蟻、蠍さそり、土亀の襲撃を避け猿群を追いながら……、よくマヌエラがゆけたと思うほどの、難行五時間後にやっと視野がひらけた。

その地峡で、軍用電線が鍵の手にまがっている。すなわちその線を前方に伸ばせないものが、あらたに迫っている密林の向うにあるのだらう。案の定、荷担バガジスぎどもは動かなくなってしまった。

ゆけ、金をやるぞとあまり語気がつよいと、おう、お嬢ヤ・ムグリ・ワンゲア

——と、なかには泣きだすものが出てくる。

じっさい、ここで一同は戻ろうとしたのだった。探検の熱意は、もう誰にもなく、ただカークの指揮でここまで来ただけでも、一同にとれば大成功といえよう。すると、座間一人がなんと思ったのか、強くゆくことを主張したのである。

殺意が……、この静かな男の面上を覆い包おおんでいるのを、そのとき誰も気が付くものはなかった。この機会、最後の密林のなかでヤンを殺やろう。と、身丈ほどもある気根寄生木の障壁、そのしたに溜っているどろりとした朽葉の水。それが、燈火へ飛びこむ蛾の運命となるのも知らず、ともかく、荷担ぎを待たして前方に

足をすすめたのである。

そのとき、地峡をとおる蛇を追うために、カークが野火をはなつた。その煙りが、娑婆しやばをうつすいちばん最後のものになったのが、隊のなかの誰と誰だろうか。そうして、最後の密林行がはじまったのである。

すると間もなく、樹間がきらきらと光りはじめてきた。森がつきる——とそのとき、どこに潜んでいたのか十四、五人のものが、一同をぐるりと取り囲んでしまった。見なれぬ土人だ。しかも、頭かしらだった一人は短いパンツをつけている。

「やあ、ナマ・サンガ今日ナマ・サンガは」

カークが進みでて愛想よく挨拶をした。しかし、練達な彼がぐ

つとつかえ、語尾が消えるように嘔かすれてしまったのだ。拳銃が：
 ；無意味な銃口をむけている。やがて、顎あごでぐいぐい引かれて森
 をでると、したは、広こうぼく漠たる盆地になっている。草葺ぶきが、固
 まっているなかに、倉庫体のもものさえある。

「ここは、どこだね」

カークが一同を怯おびえさせまいとするように、言った。すると、
 その男の口から意外にも、未ウンベカント・クライス探地帯——とドイツ語が洩
 れた。アツと、顔をみると鼻筋はなすじの正しい、色こそ熱射に焼けて
 いるが、まぎれもない白人だ。

「驚いたろう。俺は、ここに二十年あまりもいる。万一有事のと
 き、ナイルの水源を閉へいそく塞するたためにかくれている。俺はドイツ

人でバイエルタールという男だ」

こうして、想像を絶する悪魔ムラムブウエジの尿溜の怪奇のなかへと、運命の

手が四人のものを招きよせてゆくのだった。

「シユシヤア・タール猿酒郷」の一夜

一行の導かれた盆地は谿谷の底といった感じで、あか赭い砂岩の絶壁をジグザグにきざみ、遥か下まで石階いしぼしが続いている。それが、盆地の四方に一か所ずつあつて、それ以外の場所は野猿にも登れそうもない。しかし、五人のものは、なんの危害もうけなかつた。かえつて、怪人バイエルタールは上々のご機嫌だつた。

「ここ、白人諸君に会おうとはまったく夢のようだ。どうだ、

『Shushah 《シユシヤア》』という珍しいものを飲らんかね」

「いって、怪人は椰子の殻にどろりとしたものを注いで、

「ねえ君らも、子供の時に猿酒の話を聞いたろう。それが、ここへきてみると、立派に『猿酒』といえるものがあるんだよ。

これは黒猩猩がこつそり作っている。野葡萄や、無花果の類を樹洞で醗酵させ、それを飲むもんだからああいう浮かれ野郎になつちまうんだ、はっはっはっは、それでここを『猿酒郷』と名付けることにしたんだがね」

「そういつて尻ごみをする一同にはカツサバ澱粉のパンをすすめ、じぶんは『猿酒』を啣り『Daggga 《ダツガ》』という、インド大

麻に似た麻醉性の葉を煙草代りに喫っている。その両方の酔いがもう大分まわつたらしく、バイエルタールはだんだん燥あやしくなつてきた。半白の髪の様子ではもう五十にちかいだろう。ただ剛氣うっどのような目が、恍りとした快酔中にもぎらついている。

やがて、問われるままに、ここへ来た話をしはじめた。

「俺はもと、ドイツ領東アフリカ駐屯軍の一曹長だったが、一九一六年の三月にタンガンイカ湖で敗れた。そのとき俺たちの隊が退路にまよい、北へ北へといつてヴィクトア・ニールにでた。それはもう話にならぬような悲惨な旅で、一人減り、二人減りで百人もいた隊が、しまいには六、七人になってしまった。みんな熱病にかかったり、毒蛇にやられてしまった。

それで、とうとうここまで逃げのびると、さすがにイギリス軍もやってこなくなつた。きつと、悪魔の尿溜ちかくで斃やられちまつたと、奴らは考えたにちがいない。しかし俺たちは生きのびていた。まるで、ロビンソン・クルーソーのような生活をして、大戦がいつ終つたかも知らないし、おまけに子まで出来た。はッはッはッは、むろんお袋は土人の女だがね」

こう言つてバイエルタールは、妙にぎらぎらする瞳でマヌエラを見据すえた。魔烟まえんのために、大分呂律ろれつが怪しくなつてゐるし、調子も、うきうきと薄気味悪いほどである。

「ところで、つい一昨年のこと、ここへマコンデから宣教師がふらふらと迷い込んできた。みるとドイツ人なんだ。話がはずんだ。

大戦が終ったということもそのとき聴いたし、故国くにも変つてしまつてナチスという、反共の天下になつた事も初めて知つた。だが、外地へゆく宣教師には特別の使命がある。スパイもやれば宣伝もやる。彼はそういう種類の男だつたのだ。それで、ともかく部落は全滅したということにして、あることないこと大嘘をこき混ぜて、マコンデの部落へいい触れさした。つまり、ここが行つてはならない危険な場所になつたということを、帰りしなに触れさしたわけだよ。しかし、俺とその男のあいだには、かたい約束ができていた。いいか、俺はどんな蛮地にしようとも、立派なドイツ国民として行動して見せるのだ」

この今様ロビンソン・クルーソーがなにを言いだすのだろうと、

一同は興味深く顔をのぞき込んだが、^{ひと}齊しくのつびきならぬ危険が起りそうな予感を覚えた。バイエルタールは、そしらぬ顔つきでお喋りを続ける。

「それはね、万一事ある場合、たとえば英仏相手の戦いがおこつた場合、まず^{ブルセラック}青と黒ニールの水源をエチオピアでとめてしまふ。

それから、俺は^{ホワイト}白ニールにでて上流を閉塞する。と、どうなる

エジプトの心臓ナイル河の水が、底をみせて^{からから}涸々に乾あがる

だろう。むろん^{かんがいすい}灌漑水が不足して^{ききん}飢饉がおこる。舟行が駄目になるから交通は杜絶する。そうなつて、^{ほうはい}澎湃とおこつてくる反

乱の勢いを、ミスルの財閥や英軍がどうふせぐだろうか」

折から天空低く爆音が聞えた。毎夕、^{ムラムブウエジ}悪魔の尿溜からくる昆虫

群をふせぐために、石鹼石ソープストーン、その他の粉霧を上空から撒くのだという。それがマコンデからみえる「鳴る霧」の正体だったのだ。ドドが飛行機をみても驚かぬわけは、おそらくこの近くにいたために、機影を知っていたせいであろうと察せられた。

それから、その飛行機のことをバイエルタールたすに訊ねると……英領ケニアの守備隊で同僚を殺し、偵察機一台をさらってここへ逃げこんできた英人飛行士で、その後、縦断鉄道測量隊をヤンプレで襲い、当分防虫剤やガソリンには不自由しないと、バイエルタールは鼻高々の説明だった。

その間も彼の目は、寝ているドドの背に置かれたマヌエラの手の上を、まるで甜なめ廻すように這はいずつているのだが、どうや

らそれも、ただの酔いのせいではなさそうに思われてきた。と突然、彼は割れるようなこやしよう哄笑をはじめた。

「分つたろう、俺はナイルの閉塞者なんだ。はっはっはっはっは、君らは妙な顔をして、俺を島流しの狂人とでも思ってるだろうが、それもよかろう。しかし、ここには武器もあり爆薬もある！ それに、月に一度は連絡機がくる。サヴオイア・マルケツテイの大輸送機が、ノルド・アフリカ・アヴィアチオーネ北アフリカ航空の線から飛んでくる。倉庫もある、飛行場もあれば格納庫もある。全部、巧みな迷彩で上空からわからんようになってる」

探検の一同は、聴いているまにだんだんと蒼あおざめてきた。今宵にも、命がなくなるかもしれぬおそろしい危機が、いま次第に切

迫しつつあるのを知ったのである。おそらく、これまでの探検隊に生還者がなかったのも、ここでバイエルタールに殺されたからにちがいない。かほどの、国の興廃にもかかわる大機密を明して、無事に帰すはずはない。カークをはじめ一人も声がなく、喪^{ほう}けて死人のようになってしまった。

ところが、座間一人だけはさすが精神医だけに、ほかの人たちとは観察がちがっていた。バイエルタールの言葉を聞いてみると、ときどき他のことを急にいいだすような、意想^{ほんいつ}奔逸とみられるところが少なくない。これは精神病患者特有の一徴候なのだ。

普通の人間でもこんな隔絶境に半月もいたら少々の嘘にも判^{みわけ}別がつかなくなるだろう。それが、バイエルタールのは二十と数年

——宣教師のでたらめをまことと信ずるのも無理はない。そのうえ、彼はインド大麻で頭脳を痺しびらせているのだ。

けれど今となつては、それがじぶんたちには狂きちがい人の刃物も同様。もう、どうあがこうにも……、彼の狂気の犠牲となるより他はなさそうに思われる。

防虫組織や飛行機などは、いかにも神秘境と背中合せの近代文明という感じだが、ナイルの閉塞、イタリア機の連絡とは、じつに華やかながら実体のない、狂人バイエルタールの極オーロラ光のような幻想だ。いやいま、この猿シユシヤア・パラスト酒宮殿きよぜんに倨然きよぜんという彼は、そのじつ、悪魔のような牧師の舌上におどらされている、あわれなお人よしの痴愚者なんだと、座間だけはそう信じていたのであ

る。

やがてドドをまじえた一行五人は小屋に押しこめられた。もつとも、番人もつけられず鍵もおろされない。武器も弾薬も依然として手にある。これはバイエルタールの手抜きというわけではなく、四か所の石階いしぼしに嚴重な守りがあるからだ。

アフリカ奥地の夜、山地の冷気が絶望とともに濃くなつてゆく。墓がまと蟋蟀こおろぎが鳴くもの憂いなかで、ときどき鬣ハイエナ狗イヌがとおい森で吠ほえている。その、森閑の夜がこの世の最後かと思うと、誰一人口をきくものもない。ときどき君が言いだしたばかりにこんな目に逢つたのだと、ヤンが座間を恨めしげに見るだけであつた。

と時が経つて暁がたがちかいころ、座間にとっては思いがけぬ

事件が降つて湧いた。一見大して奇もないようだったが、重大な意味があつた。それはとつぜん、マヌエラが気懶けだるそうな声で、なにやら独り言ひとのようなものをドイツ語で言いはじめたのであつた。「明日、牝めすをのぞいた残りを全部殺るといふんだ。人道的な方法というからには、アカスガの毒を使うだろう」

驚いたことに、男のような言葉だ。調子も、抑揚がなく朗読のようである。そして、これがなかでもいちばん奇怪なことだが、いまマヌエラが喋しゃべっているドイツ語を、当の本人が少しも知らないのである。知らない外国語を流りゆう暢ちやうに喋る——そんなことがと、一時は耳を疑いながらまえへ廻つて、座間はマヌエラをじつと見つめはじめた。

「マヌエラ、どうしたんだ、確しつかりおし！」

しかしマヌエラの目は、狂わしげなものを映してぎよろりと据すわっている。ひよつとすると心痛のあまり気が可怪おかしくなったのかもしれない。その間も、なおも諳うわごと言は続いてゆく。

「逃げやしないかな」

「大丈夫、武器は取りあげてないから、まさかと思っっているだろう。第一、石階いしばしには番人がいるし……そこを逃げて、マコンデ方面は網目のようだからな」

こうした気味の悪い独語が杜絶えると、闇の鬼気が、死の刻がせまるなかでマヌエラだけをつつんでしまう。彼女は、ちよつと間を置くとまたはじめた。

「水牛小屋の地下道は分りっこねえんだ。何時だ？ 三時だとすりや、あと二時間だが」

一体マヌエラは誰の言葉を真似ているのだろうか？ 座間は微動だもせず冷静な目で、じっとマヌエラをながめていたが、思わず……この時首をふった。すると、おなじようにマヌエラも首を振る。ハツとした座間が今度は試みに唇をとがらした。とまた、マヌエラがおなじ動作を繰り返さず。とたんに、座間はわツとマヌエラを抱きしめた。やがて、むせび泣きとともに二人の頬の合せ目を、涙が小滝のようにながれてゆくのだった。

「ああ君」

カークはじぶんとともに冷静だった座間が、近づく死の刻に取

乱してしまつたのだと思つた。しかし座間はすこしも腕をゆるめずに、まるで恋情のありつたけを吐きだしてしまふように、泣いたり笑つたりもう手のつけようもない狂乱振りだつた。が、座間は狂つたのではなかつた。彼は、悦びと悲しみの大渦巻きのなかで、こんなことを絶^きれ絶^ぎれに叫んでいた。

（『Latah 《ラター》』だ。マヌエラにはマレー女の血がある

『Latah 《ラター》』は、マレー女特有の遺伝病、発作的神経病だ。ああ、いますべてが分つたぞ。あの夜の、ヤンとのあの狂態の因^{もと}も……、いま、マヌエラの発作が偶然われわれを救つてくれることも……）

『Latah 《ラター》』は、さいしよ軽微な発作が生理的異状期に

おこる。そのときは、じぶんがなにをしているかが明白はつきりと分つていながら、どうにも目のまえの人間の言葉を真似たくなり、またその人の動作をそのまま繰り返す——つまり、反響エヒョーラリ言語、エヒョーキネジ返響運動というのがおこる。してみると、いつかのあの夜も、と——座間には次々へと浮んでくるのだ。

あのとき……、ヤンが、あたしを愛してくれますか——と小声で言うと、ちょうど、それそつくりの言葉をマヌエラが繰り返かえた。また、抱こうと腕をかけると彼女もおなじ動作をした。それから淑女らしくもない醜猥なひとり言も、思えば醜言症コブローリという症状の一つなのだ。ああ、マヌエラにはマレーの血があるのだ。おそらく、マレー人系統のマダガスカル人の血が、何代かまえに

混入したのであろう。そしていま、それがいく代か経ってマヌエラにあらわれたのだ。

血の禍わざわい、やはりマヌエラも純粹の白人ではない。しかし、いま一人もものを言わないこの小屋のなかで、どうして知りもせぬドイツ語で喋ったのだらう。それが、反響エヒーラーリー言語のじつに奇怪なところである。遠くて、普通の耳には聴えぬような音も、異常に鋭くなった発作時の、聴覚には響いてくるのである。

今しも、バイエルタールの部下二人が靴くつおと音立てて、小屋のまえを通り過ぎていったところを見ると、マヌエラは、彼らの会話を口真似したに違いない。それでは水牛小屋の地下道というのこそ、唯一のまぎれのない逃げ道だ。

こうして、マヌエラをめぐるあらゆる疑惑が解けた。まるでハイド氏のような二重人格も、怪奇をおもわせたドドの魅魍みもうも、さらに、いま五人のものが浮びあがろうとすることも、畢ひつきよう 竟まマヌエラに可憐な狂気があるからだ。座間は、息をふきかえした愛情のはげしさに泣きながら、もう一刻も猶ゆうよ予よできないことに気がついた。

「諸君、助かるかもしれん。とにかくすぐに水牛小屋へゆこう」

まず、醜言症を聴かせぬためマヌエラにはさるぐつわ猿さる轡ぐつわをし、ドド

を連れて、そつと一同が小屋を忍びでたのである。そこには、地下からうねうねと上へのびて東方の絶壁上へでる、やつと這つてゆけるほどの地下道があつた。一同はこうして、シユシヤア・タール猿シユ酒シヤア郷タールを

命からがら抜けでたのである。

やがて樹海の線に暁がはじまったころ、おそらく追手のかかる
マコンデとは反対に、いよいよ、ムラムブウエジ悪魔の尿溜へと近付く密林のな
かへ、心ならずも逃げこんで行くのだった。

なだ
雪崩れる大地

密林はいよいよふかく暗くなつて行つた。メガテリウム・グラス大こうし懶獣草の犢

ほどの葉や、スパイクのような棘とげをつけた大つたかづら蔦らの密生が、
うっそう鬱蒼そうと天日をへだてる樹葉の辺りまで伸びている。また、その
はかげ葉陰きよぜんに倨然ぜんとわだかまっている、大蝟だこのような巨木の根。その

うえ、無数に垂れさがっている気根寄生木は、柵のようからまり、瘤こぶのように結ばれて、まさに自然界の驚異ともいう大障壁をなしているのだった。しかも、下はどろどろの沢地、脛すねまでもぐるなかには、角ホーンド・ヴァイパー 毒 蛇 がいる。

蜈蚣むかでの、腕ほどもあるのがバサリと落ちて来たり、絶えず傘かさにあたる雨のような音をたてて山蛭ひるが血を吸おうと襲ってくる。まったくバイエルタールの魔手をのがれたのは一時だけのことで、またあらたな絶望が一同を苦しめはじめた。

「殺してよ、座間」

マヌエラが、しまいにはそんなことを言いだした。そして、虚うつろな、笑いをげらげらとやってみたり、ときどき嫌いなヤンへに

ツと流^{なが}眊^{しめ}を送つたりする。彼女もだんだん、正気を失いはじめてきたのだ。

さすがにカークだけは、絶えず斧^{おの}をふるつて道をひらいてゆく。しかし、蛮^{ばん}煙^{えん}瘴^{しょう}雨^うに馴れたこの自然児も、わずか十ヤードほどゆくのに二、三時間も死闘を続けるのでは、もうへとへとに疲れてしまった。一本の、馬蔓の根がとおい四、五町先にあつて、切るとずうんずうんと密林がうめきだし、しばらくカサコソと何者かが追つてくるような無気味な音をたてている。カークも全精力がつき、ぐたりと樹にもたれた。

「どうする？ なにか、こうしたらというような見込みでもあるかね」

「どうするって 一体どうなりやいいんだ」ヤンが、ぎよろつと血ばしつた目でふり向いた。

「われわれは、いつそバイエルタールに殺されちまやよかつたんだ」

とおく、一つ、鉛筆のような陽の縞しまが落ちていている。そのほかは、闇にちかいかこの密林のなかは、沢地の蒸気をうずめる塵雲じんうんのよ
うな昆虫だ。それを、蚊帳かやヴェールで避ければ布目にたかつてく
る。もう、悪魔ムラムブウエジの尿溜ムラムブウエジへはいくばくもないのだろう。

ところが、そういう筆舌につくせぬ難行のなかで、一人ドドだ
けは非常に元気だった。マヌエラを背負い、ときどき樹きにのぼつ
ては木の実をとってくる。いま密林に抱かれ大自然たに囁ささやかれ、野

性が沸然ふっぜんと蘇よみがえつて来たのである。それをヤンが見て嘲あざけるようにいった。

「こいつのためだ。こいつを、わざわざ故郷へ送りとどけるために、四人の人間がくたばろうとするんだ。おい獣、貴様、マヌエラさんというお嫁さんがいて嬉しいだらうぜ」

こうしてどこという当てもなく彷徨さまよい続けるうちに、やがて日も暮れて第一夜を迎えた。カークは、危険な地上を避けて手頃な樹を選ぼうと思い、ひよいと頭上をみると、枝を結ゆいつけたのが目に入った。ゴリラの巣だ。しかしゴリラは、一日いるだけでまたほかへ巣を作る習性がある。してみるとこのうえもない宿である。

第二日——。

一行全部ひどい下痢と不眠のなかで明けていった。湿林の瘴しやう気がコレラのような症状を起させ、一夜の衰弱で目はくぼみ、

四人はひよろひよると抜け殻のように歩いてゆく。

全身泥まみれで髭ひげはのび、マヌエラまで噎むつとなるような異臭がする。そしてこの辺から、巨樹は死に絶え、寄生木やどりぎだけの世界になってきた。これが、パナマ、スマトラと中央アフリカにしかない、ジャングルの大奇景なのである。

つまり、寄生木や無花果属いちじくの匍匐性ほふくのものが、巨樹にまつわりついて枯らしてしまうのだ。そのあとは、みかけは天を摩ます巨木でありながら、まるで綿でもつめた蛇籠じやくごのように軽く、押せば

他愛もなくぐらぐらつと揺れるのである。森が揺れる。一本のうごきが蔦つた蔓かずらにつたわって、やがて数百の幹がざわめくところは、くらい海底の真昆布の林のようである。四人とも、それには幻を見るような気持だった。

ちようど正午ごろに、大きな野象らしい足跡にぶつかつた。つぶれた棘きよくけい茎けいや葉が泥水に腐り、その池のような溜りが珈琲コーヒー色をしている。しかし、そこから先は倒木もあつて、わずかながら道がひらけた。しかしそれは、ただ真西へと悪魔の尿溜のほうへ……まさに地獄への一本道である。

疲労と絶望とで、男たちはだんだん野獣のようになってきた。ヤンがマヌエラ共有を主張してカークなぐに殴られた。しかしカーク

できえ、妙にせまった呼吸をし、血ばしつた眼でマヌエラをみる、顔は醜い限りだった。

第三日——。

ヤンが、その日から肺炎のような症状になった。漂^{ひょう}徨^{こう}と泥^{どろ}と瘴^{しょう}気^きとおそろしい疲労が、まずこの男のうえに死の手をのべてきたのだ。ひどい熱に浮かされながら、幹にすぎり、座間の肩をかりて蹠^{そつ}踉^{ろう}とゆくうちに、あたりの風物がまた一変してしまつた。

大きな哺乳類はまったく姿を消し、体重はあつても動きのしずかな、王蛇^{ボア}や角喇蜴^{イグアナ}などの爬^は虫^{ちゅう}だけの世界になつてきた。植物も樹相が全然ちがつて、てんで見たこともない根を逆だてたよう

な、気根が下へ垂れるのではなくて垂直に上へむかう、奇妙な巨木が多くなつた。それに、絶えず微震でもあるのか足もとの地がゆれている。

してみると、土の性質が軟弱になつたのか、それとも、地^{すべ}り
の危険でもあるのだろうか？ この辺をさかいに巨獣が消えたの
と思ひ合わせて、これがたんなる杞^{きゆう}憂ではなさそうに考えられて
来た。いまにも足もとの土がざあつと崩^{くず}れるのではないか——踏
む一足一足にも力を抜くようになる。しかしここで、悪魔^{ムラムブウエジ}の尿溜
の片影をとらえたようでも、森はいよいよ暗く涯^{はて}もなく深いのだ。
すると熱の高下の谷のようなところで、ヤンがマヌエラをそつ
と葉陰に連れこんだ。

「あなたは、モザンビイクに帰りたいとは思いませんか」

突然のことに、マヌエラはきよとんと目をみはった。蚊帳ヴェールを透いて、なんでこの期になって思いださせようとするのかと、涙さえ恨めしげにひかっている。

「どうしました？ なぜ、黙っているんです」

「疲れたんですわ。あたし、なにか言おうにも、言い表せないんです」

「いや、モザンビイクへ帰れる確実な方法が唯一つあるんです。それは、バイエルタールのところへまた引つ返すことだ。ねえ、あの男は白人の女を欲している」

そういつて、ヤンはとかげ蜥蜴のような目をよせてくる。足がふらつ

いて、病苦に瘦せさらばえた顔は生きながらの骸骨だ。マヌエラはぞつと気味わるくなってきた。おまけに、座間とカークは泥亀を獲りにいっていない。

「僕とあなたがゆきア、バイエルタールがなんで殺しましょう。そうして観念してあすこにいるうちにや、いつか抜けだす機会がきつとくると思うんです。ねえ、あなたの分別一つでモザンビイクへ帰れる。それとも、奴らに義理をたてて、ここで野垂死のたれじにしますかね」

「でもあたし、あなたのいう意味がすこしも分りませんけど」

「それがいかん。あいつら二人は、僕が今夜のうちにきつと片付けてみせます。熱がさがったとき、不寝番になるはずですからね」

と言いながら、ヤンはじりじりマヌエラにせまってくる。しかしそれは、どうせ死ぬものなら行きがけの駄賃と、まるで泥で煮つめたような絶望の底の、不逞不逞しきとしかマヌエラには思われなかった。熱くさい呼吸、それを避けようともがけばぐらぐらつと地がゆれる。とその瞬間……、意外にもヤンがわつと悲鳴をあげたのである。

ドドだ。犬歯を牙のようにむきだして、もの凄い唸り声をたて、唇はヤンを噛んだ血でまっ赤に染まっている。憤怒のために、ドドは野性に立ち帰ったのである。切羽つまったヤンが拳銃をだそうとすると、その手にまたパツと跳びついた。それなり二人は、ひっ組んだまま地上を転がりはじめたのだ。

大柄な獣さえこない禁断の地響きに、とつぜん、足もとがごとと地鳴りを始めた。

と見る……ああ、なんとという大凄観！ とつぜん、目前一帯の地がずずつと陥おちはじめたのである。マヌエラは足もとを掬すくわれずでんと倒れたが、夢中で蔦つたにすがりつきほつと上をみると、今しも森が沈んでゆくのだ。梢こずえが、一分一寸とじりじりと下るあいだから、まるで夢のなかのような褪あせた鈍にぶい外光が、ながい縞しま目まめをなしてさつと差しこんできたのである。森がしずむ！ マヌエラは二人の格闘もわすれ、呆然とながめていた。

大地の亀裂が蜈蚣むかでのような罅ひびからだんだんに拡がるあいだから、吹きだした地下水がざあつと傾かしいだ方へながれてゆく。しかし、

そうして崩れてゆく地層のうえにある樹々は、どうしたことか直立したままである。攀縁性の蔓植物の緊密なしぼりで、おそろく倒れずにそのまま^{すべ}這るのだろう——と考えたが、それも瞬時に裏切られた。

水の噴出がみるみる土をあらって幹根があらわれる。やがて、数尺下の支根が露^むきでも……、まるで根ごと地上に浮きでて昇つてゆくような、奇怪な錯覚さえ感じてくるのだ。なんと樹か。その地底までも届くようなおそろしい根を、マヌエラは怪物のようにながめていた。この時耳もとで座間の声がした。

「おう、^{プティ・ラディックス}深井の根！」

それが、^{ニティルダ・アンティクス}旧根樹 という絶滅種ではないのか。根を二

十身長も地下に張るといふこのアフリカ種は、とうに黒奴時代こくどの初期に滅びつつあつたはずである。

と、見る見る視野がひらけた。

思いがけぬ崩壊が風をおこして、地上の濛氣もつきが裂けたのである。とたんに、三人がはつと息を窒つめた。それまで、濛氣もつきに遮さられてさえぎずつと続いていると思われた密林が、ここで陥没地に切り折れている。

ムラムブウエジ
悪魔の尿溜——。

と三人は眩くような亢奮に我を忘れた。陥没と、大湿林の天険がいかなる探検隊もよせつけぬといわれる、この大秘境の墻かきの端まできたのだ。と思うと、眼下にひろがる大摺鉢地クレータのなかを、

なにか見えはせぬかと瞳を凝らしはじめる。

しかしそこは依然として、濛気と昆虫霧が渦まく灰色の海で、

絶壁の数かぎりない罅ひびも途中で消えてしまい、いったいどこが果

でどこが底か——この大秘境を測ることさえ許されない。ただ枯

れた幹をおとしたニテイルダ・アンティクス旧 根 樹 の、錯綜さくそうの根がゆらぐ間に

みえるのだ。強きょう鞞じんな、ピラミッド型の根が幹を支えているう

ちに、幹は枯れ、地上に落ちたその残骸は、まるで谿たにいっぱい

もつれた蜘蛛糸くもをみるようであった。やがてその枯色も、鎖ざし

はじめた昆虫霧にうつすらと霞んでしまったのである。——大秘

境「ムラムブウエジ悪魔の尿溜」はちらりと裾すそをみせ、それなり千古の神秘を人

にみせることをしなかった。

三人はしばらく感慨ぶかげに立っていた。しかし気がつくとき、その格闘のまま、ヤンとドドの姿が消えてしまっているのだ。たぶん、ひっ組んだまま陥没地に落ちたのだらうと、マヌエラは気もそぞろであったが、やがて紅い蔓花で花環を編んで、じぶんを救おうとして死んで故郷へもどったドドのために、接吻とともに底しれぬ墓へ投げこんだ。

そうして、齒がぬけたような淋しさが来たが、また陥没がはじまりそうなので此処を引きあげねばならなかった。しかし三人は、その日一日は酔ったような気持でいた。前人未踏の、この東端まできて悪魔の尿溜をのぞいたのは、おそらく有史以来この三人だけかと思うと、自然の尊位と威力を踏みにじった気にもなるが、

なによりここを出て人里に帰ることが、いまのところいちばんの問題になっている。

といつて、南へゆけばコンゴの「類人猿棲息地帯」ゴリラスツォーネ、そこではこの惨苦を繰りかえすにすぎない。してみると、北端にあたる大絶壁へ——いまアメリカ地学協会の探検があるはずだが……。

と、協議がまとまって進むことになったが……、これまでどおり、巨草荆棘けいきよくを切りひらいてゆくのではなく月かかるかも知れない。そのあいだ、この衰弱ではどうてい保つまいし、なによりこの二、三日来王蛇ボアに狙われどおしである。

「ずいぶん、考えりや保つもんですわね」

マヌエラが、ボロボロの斧をながめてふうつと吐息をし、なに

やら、座間に言えというような目配せをした。すると、座間が胸の迫ったような声で、

「じつはカーク、いまマヌエラとも相談したことだがね。ここで、君一人に自由行動をとってもらいたいのだ」

「なぜだ」

とカークはびつくりして目をみはつて、

「あんまり、唐だしぬけ突な話で訳がわからんが」

「それは、こういう訳だ。君ならここを抜けだして人里へゆけるだろう。なまじ、僕ら二人という足手まといがあるばかりに、せっかく、ある命を君が失うことになる。お願いだ。明日、僕らにかまわずここを発たつてくれないか」

「そうか」

としばらくカークは呆れたように相手をみていたが、

「なるほど、君らを捨ててゆくのはいと容易いが、しかし、ここ

に残ってどうするつもりだ」

「悪魔の尿溜へ、僕とマヌエラが踏みいるつもりなんだ」

「なに」

と、カークもさすがに驚いて、

「じゃ君らは、あの大陥没地クレータへ身を投げるつもりか……」

「そうだ、初志を貫く。だいたいこれが、僕の因循いんじゆんこそく姑息から

はじまったことだから、むろん、じぶんが蒔いた種はじぶんで蒔か

るつもりだよ。マヌエラも、僕と一緒によろこんで死んでくれる。

ただ、君だけは友情としても、どうにも僕らの巻添えにはしたくないんだ」

カークはマヌエラを振り向いた。彼女の目は断念めきつたあとあきらの澄んだ恍惚さを湛たたえて、にんまりと座間をみている。おそらく全人類中のたった二人として、悪魔ムラムブウエジの尿溜ムラムブウエジの底を踏んだときの二人の目はあの、ペンも想像も絶するおどろくべき怪奇と、また、恋の墓場としてのうつくしい夢をみるだろう。カークは、言葉を絶ってしばらく考えていた。

密林は、死んだような黄昏たそがれの闇のなかを、ときどき玉蛇ボアがおるゴウツという響きがする。と、とつぜん、カークがポンと膝ひざをうって言った。

「座間、名案があるぞ。僕にそんな莫迦ばか気げたことを、いわないでもすむようになるぞ」

「えっ、なにがあるんだ?」

「それは、この蔦葛のうえを『Kintefwetefwe』《キンテフェテフェ》に利用するんだ」

「……………」

「つまり、コンゴの土語でいう『自然草の橋』という意味だ。ああ、これまでなぜ気がつかなかったんだろう」

リビングストーンのマヌイエマ探検の部に、その『Kintefwetefwe』《キンテフェテフェ》のことがくわしく記されてある。

——マヌイエマ近傍では、川を覆うて生草の橋ができる場合が

ある。つまり、両岸からの蔓が緊密にからみ合つて、それがひろい川だと河床ちかくまで垂れてくる。踏むとふかふかとした蒲団ふとんのような感じで、足を雪から出すように抜きあげながら進む。

それがここでは、人間の身長の上の倍以上のたかさで、蔦や大蔓がとりで砦とりでのようにかためている。

その自然の架橋を、いよいよ生気を復した三人がゆくことになり、やがて、マヌエラを押しあげてそのうえに立ったのである。この大湿林を、まさか上方からながめようとは思わなかったが、さすがその大眺望にはしばらく足を停めたほどだ。地平線は、樹海ではじまり樹海でおわっている。一色のふかい緑は空より濃く、

まさに目のゆくかぎり遮るものも、またこの単色をやぶる一物さえもないのだ。そうしてついに、この大湿林を抜けることができたのである。

楽々と、それまできた十倍以上を踏破し、北側の傾斜からまわつて、絶壁のうえへ出ることができた。

見おろすと、眼下の悪魔の尿溜はいちめんの灰色の海だ。その涯がうつくしい残陽に燃え、ルウエンゾリの、絶嶺が孤島のようにうかんでいる。しかし、瘴癘しょうらいの湿地からのがれてほつとしたかと思えば、ここは一草だにない焦熱の野である。

赤い、地獄のような土がぼろぼろに焼けて、たまに草地があると思えばおそろしい流沙であった。そしてそこから、雨期には川

になる。砂サンド・リヴァ川が現われ、絶壁のちかくで地中に消えている。

「有難うカーク、どれほど君のために助かったことだろう」

「ほんとうですわ」

座間とマヌエラが真底から感謝した。それは、きて以来一滴も口にしなない、おそろしい飢渴きかつから救われたからだ。カークが砂サンド

・リヴァ

川リヴァの下の粘土層のうえが、地下流だというのをやっと思いだしたからである。ほかに、ここへくると大枝をもつてきて、ささやかながら小屋も建てられた。そうして、熱射も避け、水も手に入れ、ときどき鳥をうっては腹をみたま。が、なにより困ったのは青果類の欠乏で、そろそろ壊血病の危険きづかが氣遣きづかわれるようになってきた。

すると、ちょうど六日目の午後、一台の飛行機が上空に飛んできた。待ちに待ったアメリカ地学協会のものらしい。三人が飛びだして上着をふつていると、その飛行機からすうつと通信筒が落ちて来た。駆けよつて、ひらいてみると、明日午後——と書いてある。ながい惨苦のちにやつとモザンビイクに帰れる。マヌエラは、感きわまつて子供のよう泣きはじめた。

しかしそのとき、その衝撃シヨックが因でまたラターがおこつた。今度は、カークのまえなので隠すこともできず、座間はその晩ねむれるどころではなかつた。

（可哀そうな、かなしいマヌエラ。ここで、よしんば助かるにしろ、先々はどうなろう。治るまい、おそらく真の狂人きちがいに移つて

ゆくだろう)

暗中に、目を据えて焚火たきびを見つめながら、座間は痩せ細やるよう
な思いだった。いまに、醜しゅうわい猥わいな言葉をわめき散らすようにな
れば、美しいマヌエラは死に、ただ見るものの好色をそそるだけ
になる。よしんば助かつても空骸くわいがのこる。恥と醜汚しゅうわのなかでマ
ヌエラの肉体が生きるだけ……。

するとその時、座間の目のまえへ幻となつて、一匹の野牛の顔
があらわれた。

それは、コンデロガを発つて間もなく、曠原こうげんの灌木帯で野牛
を狩つた時のこと、砂煙をたてて、牝の指揮者のもとに整然と行
動する、その一群へ散弾をぶちこんだ。すると、腹をうたれたら

しい一匹がもがいていると、他が危険をおかしてそれに躍りかか
り、滅茶滅茶めちやめちやに角で突いて殺してしまつたのである。どうせ、駄
目なものは苦しませぬようにと、野獣にも友愛の殺戮さつりくがある。
医師にも、陰微な愛として安死術がある。

焚火のむこうで鬣狗ハイエナが嗥わらうようにうづくまっている。とたん
に、怪しい幽霊がじぶんをみているような気がした。やがて、夢
も幻もないまっ暗な眠りがはじまつたとき、座間は胸にかたい決
意を秘めたのであつた。

翌朝、もう数時間後にはここを去ろうというとき、マヌエラは
絶壁の縁にたつていた。悪魔の尿溜ムラムブウエジの大景観を紙にとどめようと
して、彼女がしきりとスケッチをとっている。そこへ、座間が背

後からしのび寄ってきた。陽炎かげろうが、まるで焰ほのおのようにマヌエラを包んでいる。頭が熱し、瞼まぶたが焼けて、じぶんは地獄に墜おちてもマヌエラを天に送ろうと、座間は目を瞑つぶり絶叫に似た叫びをあげていた。

しかも、マヌエラをみるとまた決意が鈍ってくる。大きな愛だと心をはげまし近寄ってゆくうちに知らず知らず、座間は砂サンド・川リヴァへはいつてしまった。そこには殺すものが死に、殺されるものが生きる一つの偶然が潜んでいたのだ。彼は、水はなくとも砂が動くことは知らなかった。徐々に、彼のからだは前方にはこぼれてゆき、やがて、あつという間もなく地上から消えてしまったのである。

それなり、座間の姿はけつして現われてこなかった。ただわずかな間に消えてしまったことが、まるで秘境「悪魔の尿溜」の呪のろいのように、マヌエラさえ思うよりほかになかった。

遂に「ムラムブウエジ悪魔の尿溜」敗る

座間は死に、残る二人は助けられた。

マヌエラは、疲労と悲嘆のあげく床についてしまったが、それから一月後に一通の手紙が舞いこんできた。上封は、又ヤングウエ駐在英軍測量部とあり、ひらくとなかにはもう一通の封書がある。それは、泥によごれ血にまみれてはいたが、目を疑うほどの

驚きは、愛いとしいマヌエラへ、シチロウ、ザマより——とあるのだ。マヌエラは指先を震わせて封を切った。

マヌエラよ、天罰が私にくだった。あなたを、このうえ『Lata
『《ラター》』で苦しませるのは忍びぬと思いつつとあの断崖か
らつき落そうとしたとき……私は、サンド・リヴァ砂流に運ばれて地中に
落ちこんだ。それは地中より湧わきいで地中に消える暗黒河であつ
た。

なん時間後か、なん日後か、とにかく私は闇のなかで目をさま
した。おそろしい冷氣、冥路よみじというのよみじはこれかなと思つたほどだ。
そしてどこかに、滝があるような水流の轟とどろきがする。しかし、ま

だ私が死んでないということは、やがてからだを動かそうとしたときはつきりと分った。節々が灼けるように疼くのだ。私は、それでもやつと起きあがった。手さぐりで、からだを探ってみるとざつのう雑囊がある。なかには、ライターもあり固形アルコールもある。——ああ、この、短い鉛筆でくわしくは書けない。

そこで、服地をすこし破いて固形アルコールで燃すと、ぐるりがぼんやり分ってきた。何処もかもが真白にみえる。目を疑った。すると、天井から雪のようなものが落ちてきた。甜なめて見ると唇につうんと辛味を感じた。それでやつと分った。私は サンド・リヴァ砂川から岩塩の層に落ちこんだのだ。地下水が岩塩を溶かしてつくる塩の洞窟だ。マヌエラ、あなたには想像もできまい。まるで月世

界の山脈か砂丘のような起伏、石^{せき}筍^{じゆん}、天井からの無数の乳房、それが、光をうけるとパツと雪のようにかがやく。浄^{きよ}らかな……
 まったくこんな中で死ねれば有難いと思つた。

畝^{うね}もある。なかには氷^{クレヴァス}罅^{アス}もある。ときどき、雹^{ひょう}のようなのがばらばらつと降つたり、粉塩を小滝のように浴びることがある。と、ふとそばの壁をみたとき、思わず私ははつと呼吸^{いき}をとめた。そこには巨^{おお}きな粗毛だらけのまつ黒な手が、私を掴^{つか}もうとするようにぬうつと突きでている。

マヌエラ、これが悪魔の尿溜の神秘「^{セブルク}知られざる森の墓場^{ルックジ}」だ。類人猿が、じぶんを埋葬^{くす}にくる悲愁の終焉^{しゆうえんち}地だと思うと、私はその壁を無性にかき崩した。すると、その響きにつれてどつと

雪崩れる。ああマヌエラ、塩を雪のようにかぶって起きあがったなだとき、一つ二つ、臨終そのままの姿であるいは立ち、あるいは蹲うずくまり、あるいは腕を曲げ、ゴリラや黒猩猩々が浮き彫りのように現われてくる。まったく絶えざる水蝕でかわるこの洞窟の中では、これが数百年あるいはなん千年まえのものか。ともかく、塩にうずまつてすこしも腐らずに、今日まで原形を保ってきたのだ。ああ、私は悪魔の尿溜に入りこんで、最奥の神秘をみた全人類中のたった一人の男だ。

そうして、間もなく死ぬだろうじぶんさえも忘れ、ただ人間が自然に対してした最大の反逆を、歓喜のなかで溶けるように味わっていたのだ。

それから、滝は地底へと落ちている。それを知って、私は非常に落胆した。なぜなら、もしその地下水が絶壁へでていけば、そこから、悪魔の尿溜の大観を窺うことができし、また位置が低ければあるいは出ることでもできよう。しかし駄目だ。私は底から盛りあがってくる暗黒の咆哮ほうこうに、いよいよ出口がなく、いま岩塩の壁で密閉されていることを悟った。事実も、絶えず洞窟の形が水蝕で変っているらしい。

すると私は、ここの低温度がひじょうに気になってきた。獣類ならともかく人間は、うかうかすると凍死する危険がある。まったく、アフリカ奥地の夏に凍え死ぬなんて、ここが地下数十尺の場所とはいえ皮肉なもんだと思つた。

すると、そこへ一つの考えがうかんできた。それはいうのもじつに厭なことだが、いま暖をとるものといえればそれ以外にはない。私は、類人猿の死骸に目をつけた。

それからのことは、婦人であるあなたには詳述を避ける。とにかく、ここへ死にに来て相当の期間生きていたものには、体内にほとんど脂肪の層がない。ともあれ……やつらを燃やしてみることにした。

さいしよ、口腔くちに固形酒アルコール精をいれて、それに火をつけた。

まもなく火が脳のほうへまわって眼球が燃えだした。ごうつと、二つの窩あながオレンジ色の火を吹きはじめた。洞内が、なんともいえない美しさに染にじんでゆくのだ。裂け目や条痕の影が一時に浮き

あがり、そこに氷河裂罅クレヴァスのような微妙な青い色がよどんでいる。淡紅色ときいろの胎内……、そこを這はいずる無数の青蚯蚓みみず。しかし、死骸は枯れきっていてなんの腥なまぐささもない。

私は、そうして暖まり、肉も喰った。しかし肉は、枯瘦こそうのせい
か革を噛むように不味まずかった。マヌエラ、私がなにをしようと許
してくれるだろうね。

ところが、三つほど燃やして四つ目をひきだそうとしたとき、
ふいに天井が岩盤のように墜落した。雪崩れが、洞内の各所にお
こつて濛ぼうつと暗くなった。それが薄らぐと崩壊場所の奥のほうが
ぼうつと明るんでいる——穴だ。それから、紆余曲折うよきよくせつをたどつ
て入口のへんにまで出た。そこには、最近のものらしい四、五匹

が死んでいる。マヌエラ、私は洞をでてはじめて外の空気を吸った。いよいよ私は悪魔の尿溜ムラムブウエジのなかにでたのだ。

夜だった。空には、濛氣もうぎの濃い層をとおして赭色あかにみえる月が、すばらしく、大きな暈かきをつけてどんよりとかがっている。私はいまだに、これほど超自然な不思議な光輝をみたことはない。中天にぼやつとした散光をにじませ、その光はあつても地上はまつ暗なのだ。

すると、この森閑とした死の境域へ、どこか遠くでしている咆ほ哮うこうが聴えてきた。それが、近くもならず遠くもならず、じつにもの悲しげにいつまでも続いている。と、それから間もなくのこと、ようやく、暁ちかい光がはじまろうとすると、ふいに私

の目のまえにまっ黒なものが現われた。ぎよつとして、それを見つめながら、じりじりと後退あとじさ退さつていった。

マヌエラ、なんだと思うね。カークほどの身の丈で、お父さんより肥ふつていて、片手を頭にのせてずしりずしりと歩いてくる。

時には、両肢りようあしをかがめその長い手で、地上を掃はきながら疾風

のようにはしる——ゴリラだ。私は、それと分るとぞつと寒気がし、顎あごががくがくとなり、膝がくずれそうになった。私は懸命に

洞の中へ飛びこみ、最前の穴らしい窪みを見つけて隠れた。が、その洞穴ほらあなは、浅くゆき詰くっている。なお悪いことに、そのゴリラが穴のまえで蹲うずくまつたのだ。やがて、夜が明けたとき、視線が打ぶつつか衝つつた。私は、あの偉かい偉いな手の一撃でつぶされただろうか。

マヌエラ、私は暫くしてから啮いはじめたのだよ。じぶんながら、なんとという迂闊うかつものだろうと思つた。なんのために、そのゴリラが森の墓場へきたか忘れていたのだ。ゴリラはさいしよ、私をみたとき低く唸つたが、ただ見るだけで、なんの手だしもしない。

七尺あまり、頭はほとんど白髪でよほどの齡らしい。つまり、老衰で森の墓場へきたのだと、私はやつとそう思つた。野獸がここへくるときは鬪争心は失せ、なにより彼らを狂暴にする恐怖心を感じぬらしい。そして食物もとらず餓えながら、静かに死の道にむかつてゆくのだ。マヌエラ、ここで私は冥路よみじの友を得たのだ。

Soko 《ソコ》——と、やがてそのゴリラをそつと呼んでみた。

いの『Soko』《ソコ》『というのはコンゴの土語で、むしろ彼らにたいする愛称だ。それから、Wakhe』《ワケ》, Wakhe』《ワケ》——と、檻おりのゴリラへする呼声をいっても、その老獣はふり向きもしなかった。

ただ遠くで、家族らしい悲しげな咆哮が聴えると——ほとんどそれが、四昼夜もひっきりなく続いたのだが——そのときは惹ひかれたようにちよつと耳をたて、しかもそれも、ただ所作だけでなんの表情にもならない。そうして、私とゴリラと二人の生活が、十数日間にわたって無言のまま続いた。私は、同棲者になんのか心も示さない、こんな素っ気ない男をいまだにみたことはない。

さて、もう鉛筆もほとんど尽きようとしている。あとは、簡略

にして終りまで書こうと思う。

それから、私は精神医としていかにゴリラを観察したか、特にアツコルテイ先生に伝えて欲しいと思う。それからも、毎日ゴリラはその場所を動かさず、ただだる懶そうに私をみるだけだった。衰弱のために、もう動くのさえどうにもならぬらしい。私が脈を見てもぼんやりと委せているだけだ。しかし、これは森の墓場へきたという本能だけではなく、先天的にゴリラというやつは体質性のメランコリア憂鬱症なのである。つまり、「アブノルメ・テンデンツ・デプレシヨネン沈鬱になり易い異常的傾向」がある。ああ、また鉛筆の芯しんが折れた。もう私は、これを書いてはいられない。

ここで早く、あなたへの愛とカークへの友情と、やがて私が死

ぬだろうということを書かねばならない。私は、ながらく肉食ばかりしたため壞血病にかかった。いまは、はぐき齒齦の出血が、日増しにひどくなつてゆく。そうだ！ 病の因となつた青果類はむろんのこと、この悪魔の尿溜ムラムブウエジには一点の緑すらもないのだ。昆虫霧で、日中さえ薄暮のように暗い。その下は、ただ鹹しおざわ沢の結晶が瘡かさのようニティルダ・アンティクスにみえるだけで、
 旧 根 樹 の枯根がぼうぼうと覆う
 ている。

その根をゴリラのように伝わることが出来ればいいが、人間で、おまけに今の私にはそんな体力はない。まったくのところ、どこかの一隅に有尾人がいるかもしれない。またどこかに、象の腐屍がごろごろ転っていて、それを食う群虫がその昆虫霧かもしれないな

い。しかし、この一局部にいてはなににも分らないのだ。ただ、ここが森の墓場であり、荒廃と天地万物が死を囁ささやいてくる、場所であることだけは知っている。

私はきようめずらしくがらんちよう鵜※をつかまえた。よくあなたがドドを馴らして、木のポストに入れさせていた封筒のことを思い出したのだ。私はそれで、この手紙を書いてその封筒にいれ、がらんちよう鵜※に結びつけて放そうと思う。運よく……、そんな機会は万一にもあるまいが、もし、あなたの手に入ればそれは愛の力だ。

私は、この墓場に埋まる最初の人間として……悪魔の尿溜にいり込んだはじめての男として……また、ゴリラと親和した唯一の人として……ことに、あなたへの献身をいちばん誇りとする……。

いま、午後だが大雷雨になってきた。もう一日、この手紙を続けて、がらんちよう鵜※を放すのを延ばそう。

マヌエラ、この一日延ばしたことがたいへんな禍わざわいとなった。といつて、いま私が死のうとしているのではない。私が、いままで心を向けていたあらゆるものの価値が、まるで、どうしたことが感ぜられなくなってしまうのだ。あなたのこと、カークのことともこの悪魔ムラムブウエジの尿溜征服も、いっさい過去のものが塵ちりのように些さ細さいにみえてきた。

どうしたことだろう。じぶんでそうであつてはならないと心を励まして、その力がまるで呪縛じゆばくされているように、すうつと抜けてしまうのだ。きつとマヌエラ、これは魂を悪魔ムラムブウエジの尿溜に奪

われたのだろう。人間という動物であるものが森の墓場へきて、恋人をおもったり娑婆しやばを恋しがったりすることが、そもそも悪魔の尿溜うりずみの神さまにはお気に召さないのかもしれない。戒律タイだ。それを破った私は当然罰せられる。それで今日から、「知られざるム・ルクジ森の墓場」の掟おきてに従うことになった。いや、おそろしい力に従わせられたのだ。

今朝、ゴリラがちょうど二週間目に死んだ。

私は、鹹しおざわ沢しおざわのへりにいて洞窟ほらにいなかつたが、そこへ妙な聴きなれない音が絶きれ絶きれにひびいてくる。それが、洞窟ほらのほうなのでさっそく戻ると、ゴリラがまさに死のうとする手でじぶんの胸をうち、かたわらの石をうっては異様な拍子を奏うでているの

だ。私もゴリラに音楽があるという噂は聴いていたけれど、その音は、「いま遠い、遠いところへゆく」と叫んでいるようなもの悲しげなものだった。私は、とたんに哀憐の情にたまらなくなつてきて、ゴリラの最期を見護みとろうと膝に抱えたとき、意外な、軽さにすうつと抱きあげてしまった。

まったく、力のあまりというのが、その時のことだろう。ながい、絶食と塩分の枯瘦こそうとで、そのゴリラは骨と皮になっていた。それにしても、この私とてもおなじように瘦やせ、まして、壊血病になやみながらこの老巨獣を、抱きあげられたことはなんといいても不思議であった。私は、ここにいる間に森の人になったのではないか。痩せても二百ポンド以上のものを軽々とのせ、その両

手をみたときは泥のような酔心地だった。

ゴリラを抱いた。と、すべて人間社会にあるものが微細にみえてきた。個人も功績も恋愛などというものも、すべて吹けば飛ぶ塵のようにしか考えられなくなった。マヌエラ、これが悪魔の尿溜の墓の掟なのだ。獣は野性をうしない、人は人性をわすれる――私も死にゆく巨獣となんのちがいがあろう。

こうして、私は、ムラムブウエジ悪魔の尿溜を征服し、そうして征服されたのだ。だがマヌエラ、まだ私はさようならだけはいえるよ。

座間の手記は、ここで終っていた。ムラムブウエジ悪魔の尿溜の妖気ようきに、森の掟に従わされ、よしんば生きていても遠い他界の人だ。不思議と

マヌエラには一滴の涙もでなかつた。

彼女はなかに、もう一通同封されている英軍測量部の手紙をと
りあげた。

敬愛するお嬢さま——同封の書信を、お送りするについて、一
奇譚きたんを申しあげねばなりません。それは、この発信地のヌヤング
ウエのポスト下には、同封の書信を握りしめた異様な骸骨が横た
わっていたのです。それは、丈が四フィートばかりで、人間とも、
類人猿ともつかぬ不思議なものでありました。当地は、おそろし
い蟻の繁殖地で、朝の死体は夕には、肉はおろか骨の髄まで食わ
れてしまうのです。ただ、その骸骨が不思議なものであつただけ

に、その旨を御興がてらに申し添えて置きます。

ドドだ！ マヌエラは、大声でさげんだ。

ドドは、ヤンと一緒に陥没地へ落ちたが、やはり生きていたのだ。そうして、座間が放った鵜がらんちよう※をとらえ、肢に結びつけてある

封筒をみたとき、急にあの訓練を思いだしてヌヤングウエのポストへいったのだ。そしてそのあいだの、百マイルの道に精も根もつき、やつと辿たどりついて昏倒こんとうしたところを残忍な蟻どもに喰われたのだらう。

彼女は、草原の熱風に吹きさらされる骨を思い、座間の怪奇を絶した異常経験には、一滴も、流さなかつた涙をすうと滴らした。

それから、ドドの血がついた封筒に唇をあて、人間よりも、高貴な純真なドドのために、心からの親しさでそつと十字を印したのである。

青空文庫情報

底本：「人外魔境」角川ホラー文庫、角川書店

1995（平成7）年1月10日初版発行

底本の親本：「人外魔境」角川文庫、角川書店

1978（昭和53）年6月10日発行

※副題は底本では、「有尾人『ホモ・コウダツス』」となっております。

入力：藤真新一

校正：鈴木厚司

2001年7月20日公開

2014年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

人外魔境

有尾人

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 小栗虫太郎
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>